

館報<sup>1982</sup> 31

# ANNUAL REPORT

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

ブリヂストン美術館  
久留米・石橋美術館



# ブリヂストン美術館

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

# 久留米・石橋美術館

ISHIBASHI MUSEUM OF ART

# 館報 1982 31

1982  
昭和57年度

## 目次

1	設立趣旨, 機構・運営	2
2	主な記録	4
	ブリヂストン美術館	
	• 特別展	4
	• 地方展他	12
	• その他の記録	17
	• 土曜講座	18
	石橋美術館	
	• 特別展	20
	• 美術館講座	29
3	1982年度入場者数	30
4	新収蔵作品	31
5	修復記録——黒江光彦	35
6	研究報告——中田裕子	36
7	美術館案内	48

---

## 設立趣旨

### ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、石橋正二郎氏が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、昭和27年1月8日、ブリヂストンビルディング建設の機会に開設されたものであり、昭和31年4月設立された財団法人石橋財団がその経営を継承、昭和36年9月同財団が石橋氏から所蔵美術品一切の寄贈を受けた。なお、昭和34年5月には面積が二倍に拡張されると共に、設備に大改良を加えた新装工事が完成した。

### 石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎氏が昭和31年4月26日、ブリヂストンタイヤ株式会社創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土・久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。昭和52年、創設者・石橋正二郎氏の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の委託により、石橋財団がその経営に当たっている。

## 機構・運営

(昭和58年3月31日現在)

### 石橋財団

**理事長** 石橋幹一郎  
**理事** 鳩山威一郎、茅 誠司、柴田周吉、盛田昭夫、有田一寿、今泉篤男、氷室憲吉、嘉門安雄  
**監事** 加嶋昭男、亀徳正之、赤司二郎  
**評議員** 石橋幹一郎、茅 誠司、柴田周吉、今泉篤男、竜頭文吉郎、鶴沢 晋、石井公一郎、木村 登、小林行雄、郷 裕弘、河北倫明、谷 信一、山田智三郎、朝吹三吉、石橋 寛、真藤 恒、高碓芳郎、吉久勝美、氷室憲吉、嘉門安雄、谷口鉄雄

**事務局長** 氷室憲吉                      **総務部長** 門司一二三

### 美術館運営委員会

**委員長** 石橋幹一郎  
**委員** 今泉篤男、河北倫明、谷 信一、山田智三郎、朝吹三吉、脇田 和、高階秀爾、友部 直、石橋 寛、嘉門安雄、谷口鉄雄

### ブリヂストン美術館

**参与** 久保貞次郎、松本栄一  
**館長** 嘉門安雄                      **事務部長** 加賀 守      **学芸課長** 阿部信雄

### 石橋美術館

**館長** 谷口鉄雄                      **学芸課長** 山上隆之輔      **事務課長** 渡辺啓一郎

---

## BRIEF HISTORY

### BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

On January 8, 1952, in celebration of the completion of the Bridgestone Building, Mr. Shôjirô Ishibashi, ever mindful of the promotion of cultural development in Japan, opened to the public an art gallery within the building, under the name of "Bridgestone Gallery." Mr. Ishibashi's personal collection formed the nucleus of the exhibits of paintings, sculptures and other art objects. In April 1956 the management of the Gallery was taken over by the Ishibashi Foundation, and in September 1961 Mr. Ishibashi donated numerous art objects of his collection to the Foundation. In May 1959 the Gallery was considerably enlarged and entirely renovated, and in January 1968 the English name was changed from "Bridgestone Gallery" to "Bridgestone Museum of Art."

### ISHIBASHI MUSEUM OF ART

On April 26, 1956, in celebration of the 25th anniversary of the founding of the Bridgestone Tire Co., Ltd., Mr. Shôjirô Ishibashi donated the Ishibashi Cultural Center to the city of Kurume, his native place, for the purpose of rendering services to the public and promoting cultural development. The Museum (originally called "Ishibashi Art Gallery") is the main institution of the Center. In 1971 the English name was changed from "Ishibashi Art Gallery" to "Ishibashi Museum of Art." In 1977, thanks to a contribution of the bereaved family of Mr. Shôjirô Ishibashi, the building of the Museum was reconstructed and extended, and in April of the same year the Ishibashi Foundation was entrusted with the management of the Museum by the city of Kurume.

## ORGANIZATION & MANAGEMENT

(As of March 31, 1983)

---

### Ishibashi Foundation

**President of the Board of Directors** Kanichirô Ishibashi

**Directors** Iichirô Hatoyama Seiji Kaya Shûkichi Shibata Akio Morita  
Kazuhisa Arita Atsuo Imaizumi Kenkichi Himuro Yasuo Kamon

**Auditors** Akio Kashima Masayuki Kitoku Jirô Akashi

**Councillors** Kanichirô Ishibashi Seiji Kaya Shûkichi Shibata Atsuo Imaizumi  
Bunkichirô Ryûtô Susumu Uzawa Kôichirô Ishii Noboru Kimura  
Yukio Kobayashi Yasuhiro Gô Michiaki Kawakita Nobukazu Tani  
Chisaburô Yamada Sankichi Asabuki Hiroshi Ishibashi Hisashi Shintô  
Yoshirô Takasaki Katsumi Yoshihisa Kenkichi Himuro Yasuo Kamon  
Tetsuo Taniguchi

---

**Managing Director** Kenkichi Himuro **General Affairs Manager** Hifumi Monji

### Executive Committee of the Museums

**Chairman** Kanichirô Ishibashi

**Members** Atsuo Imaizumi Michiaki Kawakita Nobukazu Tani Chisaburô Yamada  
Sankichi Asabuki Kazu Wakita Shûji Takashina Naoshi Tomobe  
Hiroshi Ishibashi Yasuo Kamon Tetsuo Taniguchi

---

### Bridgestone Museum of Art

**Councillors** Sadajirô Kubo Eiichi Matsumoto

**Director** Yasuo Kamon

**Administrator** Mamoru Kaga **Chief Curator** Nobuo Abe

---

### Ishibashi Museum of Art

**Director** Tetsuo Taniguchi

**Chief Curator** Ryûnosuke Yamagami **Administrator** Keiichirô Watanabe

---

## 主な記録 ブリヂストン美術館

### 《特別展》

ブリヂストン美術館開館30周年記念

フランス大統領来日記念

#### 具象絵画の革命——セザンヌから今日まで

1982年4月18日(日)―5月16日(日)(月曜休館/25日間)

主催：石橋財団ブリヂストン美術館/東京新聞/フランス芸術活動協会

後援：外務省/文化庁/フランス外務省/フランス文化省/フランス大使館

出品内容：絵画60点

入場者総数：26,179人

ポール・セザンヌ(1839―1906)

1. サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール 油彩, 画布/65.5×81cm/1898―1900年または1904―06年(ブリヂストン美術館蔵)

クロード・モネ(1840―1926)

2. 睡蓮, 水の風景 油彩, 画布/81×99cm/1903年(ブリヂストン美術館蔵)

アンリ・ルソー(1844―1910)

3. 郊外:アルフォールヴィルの椅子製造所とセヌ河畔の眺め 油彩, 画布/73×93cm/1897年(パリ, オランジュリー美術館蔵)

アルベール・マルケ(1875―1947)

4. ロッテルダム 油彩, 画布/65×81cm/1914年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

アンドレ・ドラク(1880―1954)

5. 老木 油彩, 画布/41×33cm/1904―05年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

アンリ・マティス(1869―1954)

6. ばら色の壁 油彩, 画布/38×46cm/1898年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ラウル・デュフィ(1877―1953)

7. トルーヴィルのポスター 油彩, 画布/65×81cm/1906年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ピエール・ボナール(1867―1947)

8. ヴェルノン付近の風景 油彩, 画布/63.5×62cm/1929年(ブリヂストン美術館蔵)

モーリス・ユトリロ(1883―1955)

9. サン=ドニ運河 油彩, 厚紙/54×75.5cm/1906―08年(ブリヂストン美術館蔵)

パブロ・ピカソ(1881―1973)

10. 風景 油彩, 画布/130×162cm/1972年(パリ, ピカソ美術館蔵)

ジョルジュ・ブラック(1882―1963)

11. 鋤のある風景 油彩, 画布/34×64cm/1955年(パリ, マーグ画廊蔵)

ポール・シニャック(1863―1935)

12. コンカルノー港 油彩, 画布/73×54cm/1925年(?) (ブリヂストン美術館蔵)

藤田嗣治(1886―1968)

13. 巴里風景 油彩, 画布/46×55cm/1918年(ブリヂストン美術館蔵)

フェルナン・レジェ(1881―1955)

14. サーカス 油彩, 画布/58×94.5cm/1918年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ロベール・ドロネー(1885―1941)

15. 円形のフォルム:月 No.3 蠟画, 画布/25.5×21.1cm/1913年(パリ, シャルル・ドロネー氏蔵)

マルセル・デュシャン(1887―1968)

16. 薬局 レディ・メード/26.2×19.2cm/1914/1936―41年(ティニー・デュシャン夫人蔵)

ジャック・ヴィヨン(1875―1963)

17. トゥールーズとアルピの間 油彩, 画布/54×78cm/1941年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

マン・レイ(1890―1976)

18. 桃 景 アサンブラージュ/33×22×10cm/1969年(パリ, ジュリエット・マン・レイ夫人蔵)

ジョルジオ・デ・キリコ(1888—1980)

19. 吟遊詩人 油彩, 画布/61.8×49.3cm/1916年頃(ブリヂストン美術館蔵)

ジョルジュ・ルオー(1871—1958)

20. 郊外のキリスト 油彩, 画布に貼られた紙/92×74cm/1920年(ブリヂストン美術館蔵)

カイム・スーティン(1894—1943)

21. 大きな樹のある南仏風景 油彩, 画布/50×61cm/1924年(ブリヂストン美術館蔵)

アンドレ・マッソン(1896—)

22. 沼地 油彩, 画布/60×150cm/1956年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

マックス・エルンスト(1891—1976)

23. 三本の糸杉 油彩, 画布/103×98cm/1951年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ジョアン・ミロ(1893—)

24. 絵画—1927 油彩, 画布/80×115cm/1927年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

イーヴ・タンギー(1900—1955)

25. 青い水底 油彩, 画布/60×49cm/1929年(東京, 個人蔵)

サルバドール・ダリ(1904—)

26. 幽霊のような牝牛 油彩, ベニヤ板/50×64.5cm/1928年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

バルテュス(1907—)

27. 牧歌 油彩, 画布/53×101.5cm/1959—60年(パリ, クロード・ベルナル画廊蔵)

アルベルト・ジャコメッティ(1901—1966)

28. スタンパの庭 油彩, 画布/89×62cm/1954年(パリ, マーグ画廊蔵)

フランシス・グリユベール(1912—1948)

29. ヴァル=ディゼールの風景 油彩, 画布/81×100cm/1943年(パリ, M. バゼーヌ氏蔵)

ジャン・エリオン(1904—)

30. 屋根 油彩, 画布/114×146cm/1959年(パリ, 個人蔵)

ルイ・フェルナンデス(1900—1973)

31. ノルマンディー風景 テンペラ, 板/16×22cm/1945—52年頃(パリ, ベネディクト・ペースル蔵)

ジャン・デュビュッフエ(1901—)

32. 泥のミサ 紙粘土, 板/150×195cm/1959—60年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ピエール=タル=コアット(1905—)

33. 宙に浮かぶものII 油彩, 画布/130×162cm/1975年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ニコラ=ド=スタール(1914—1955)

34. アンティープの砦 油彩, 画布/130×89cm/1955年(パリ, ジャック・デュブル夫人蔵)

アンリ=ミシヨ= (1899—)

35. 戦場 墨, 紙/75×105cm/1963年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

エドゥアル=ピニオン(1905—)

36. 燃えるオリーブの木のある黄土色の風景 油彩, 画布/195×260cm/1956年(作者蔵)

ベルナル=レキシヨ(1929—1959)

37. 森の聖遺物箱 ガラス張りの箱の中の絵具の集塊/66.5×45.5×20.3cm/1957—58年(パリ国立近代美術館=ポンピドゥー・センター蔵)

ロベルト=マッタ(1911—)

38. 連合した自然(三連作) 油彩, 画布(3枚)/200×200/200×300/200×200cm/1965年(作者蔵)

マルシアル=レイス(1936—)

39. 視覚は感性の現象である 油彩, 組み合わせられた画布とネオン管/115×130cm/1966年(パリ, R. オディ夫妻蔵)

ジャック=モノリー(1934—)

40. カスパール=ダヴィッド=フリードリヒ讃 No.1 油彩, 画布/162×260cm/1975年(作者蔵)

ジェラルール・フロマンジェ(1939—)

41. フランソワ・トビノ＝ルブラン 讃:民衆の生と死 油彩, 画布/200×300cm/1977年(パリ, マリー＝エレーヌ・モントネー蔵)

レオナルド・クレモニーニ(1925—)

42. いとしいママへ テンペラと油彩, 画布/130×195cm/1972—73年(作者蔵)

アントニオ・レカルカティ(1938—)

43. ポン・デ・ザール 油彩, 画布と型押し/150×200cm/1963—64年(パリ, J.P. ラバレット蔵)

エドアルド・アローヨ(1937—)

44. ロビンソン・クルーソー 油彩, 画布/220×180cm/1966年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

ジル・アイヨー(1928—)

45. 濠 油彩, 画布/200×250cm/1967年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

ダド(1934—)

46. 広く青い浜辺 油彩, 画布/161×405cm/1969年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

ジャン＝オリヴィエ・ユクルー(1923—)

47. 墓地 No.6 油彩, ベニヤ板/200×300cm/1971年(パリ国立近代美術館＝ポンピドゥー・センター蔵)

ジェラルール・シュロッセール(1931—)

48. 彼女はそれに慣れることができなかった 油彩, 砂を撒いた画布/190×190cm/1977年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

クリスト(1935—)

49. 海岸(キング・ビーチの入江を覆うための計画) デッサンとコラージュ/74×58cm/1974年(パリ, 個人蔵)

エロ(1932—)

50. 魚 景 油彩, 画布/200×300cm/1974年(ヴィトリエ, 個人蔵)

ペーター・クラゼン(1935—)

51. 制限速度:時速60キロ 油彩, 画布/200×260cm/1980年(パリ, マーグ画廊蔵)

ダニエル・ボムルール(1937—)

52. 空の摩耗 パステル, 紙/61×98cm/1981年(パリ, ル・デッサン画廊蔵)

ジャンフランコ・バルケッロ(1924—)

53. あなたの背丈/三本の矢をつがえた三弦の矢のように/チョコレート色/アルファベットの木 エナメル, アルミニウム板(4枚)/各50×50cm/1981年(作者蔵)

アルド・モンディーノ(1938—)

54. 海岸にて 油彩, 画布/180×240cm/1981年(作者蔵)

エルヴェ・テレマック(1937—)

55. ヴァロワ, 雀はいない 油彩とコラージュ, 画布/194×138cm/1980年(パリ, マーグ画廊蔵)

ティティエナ・マゼッリ(1924—)

56. ニューヨークのフットボール 油彩, 画布/200×200cm/1979年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

ルチオ・フォンタナ(1945—)

57. 詩の小舟は日常の流れゆく生活に砕け散った 油彩とアクリル, 画布/195×195cm/1979年(パリ, 国立現代芸術基金蔵)

ジャン＝ポール・シャンパス(1947—)

58. エジプトからの帰還 色鉛筆のデッサン, 画布に貼られた紙/150×300cm/1979年(パリ, クリーフ＝レーモン画廊蔵)

アントーニオ・トレ(1945—)

59. 金属的な物体 油彩, 画布/81×100cm/1980年(パリ, 個人蔵)

クリスティアン・ブイエ(1948—)

60. 事物が私たちを思う 油彩, 画布/114×145cm/1980年(作者蔵)

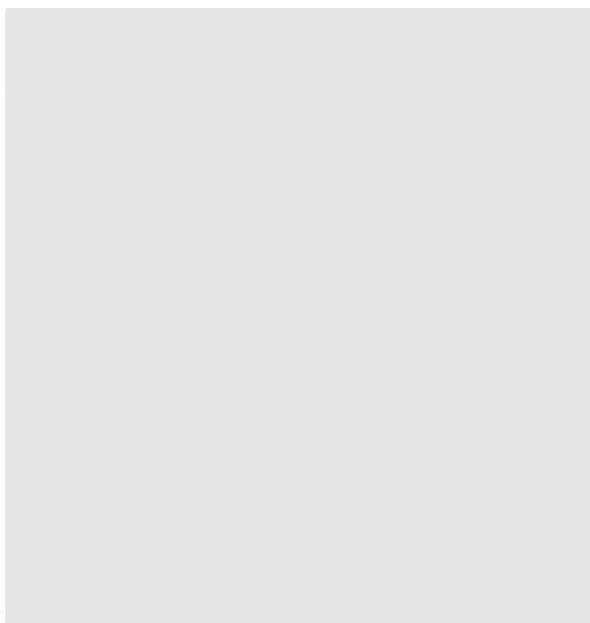
# 具象絵画の革命/セザンヌから今日まで

FIGURATIONS REVOLUTIONNAIRES de Cézanne à Aujourd'hui

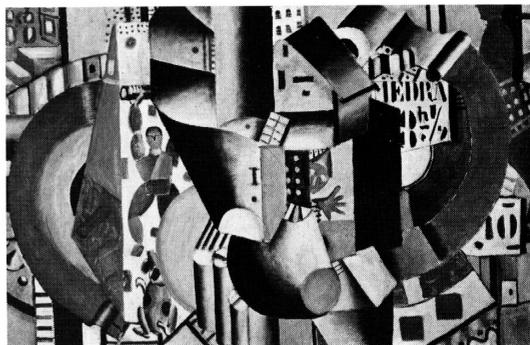
1982年4月8日(日) - 5月6日(日) 開催場所: プリヂストン美術館



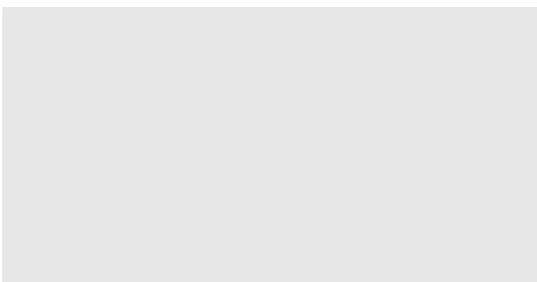
展覧会ポスター



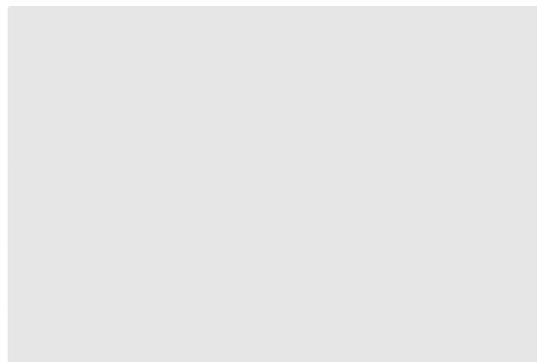
アラン・ジュフロワ氏とジャック・ラング文化大臣



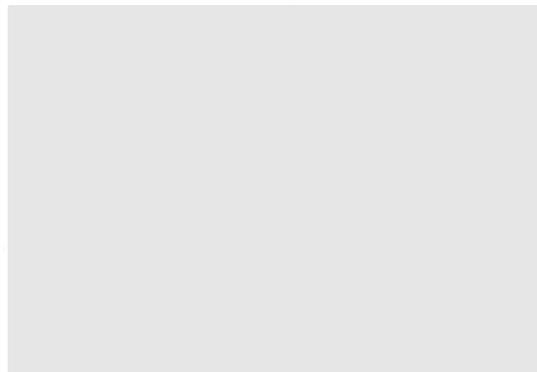
14



27



41



50

ブリヂストン美術館開館30周年記念

エルミターージュ美術館秘蔵

## レンブラント展

1982年9月11日(土)―11月3日(水)(月曜休館,ただし10月11日(月)開館,翌12日(火)閉館/46日間)

主催:石橋財団ブリヂストン美術館/ソ連文化省/エルミターージュ美術館/東京新聞/笠間日動美術館

後援:文化庁/駐日ソ連大使館

出品内容:油彩10点,素描2点,エッチング100点

入場者総数:168,003人

- P. 1. 学者の肖像 油彩, 画布/104×92cm/1631年  
2. 東方三博士の礼拝 油彩, 画布の上に貼付けられた紙/45×39cm/1632年  
3. フローラを装うサスキア 油彩, 画布/125×101cm/1634年  
4. アブラハムの犠牲 油彩, 画布/193×132.5cm/1635年  
5. 天使のいる聖家族 油彩, 画布/117×91cm/1645年  
6. 老ユダヤ人の肖像 油彩, 画布/109×84.8cm(本来は89×76.5cm)/1654年  
7. 老婆の肖像 油彩, 画布/109×84.5cm(本来は89×76.5cm)/1654年  
8. キリストとサマリヤの女 油彩, 画布/60×75cm/1659年  
9. 男の肖像 油彩, 画布/71×61cm/1661年  
10. ダビデとウリア(?) [モルデカイに栄誉を与えるよう命じられたハマニ(?)] 油彩, 画布/127×116cm/1665年頃
- D. 1. 肘掛け椅子に座る女 ペン・筆・ビスタ・紙/140×107mm/1634―35年  
2. 木立 ペン・筆・ビスタ・ホワイト・紙/178×355mm/1648―50年
- E. 1. ソフト帽をかぶった自画像(B. 2) エッチング/50×43mm/1634年頃  
2. 大きな鼻の自画像(B. 4) エッチング/72×57mm/1628年頃  
3. 口を開けた自画像(B. 13) エッチング/73×61mm/1630年  
4. 帽子をかぶりスカーフを巻いた自画像(B. 17) エッチング/132×104mm  
5. サスキアにいる自画像(B. 19) エッチング/104×95mm/1636年  
6. 石の敷居に寄りかかるレンブラント(B. 21) エッチング/205×164mm/1639年  
7. 窓辺でデッサンするレンブラント(B. 22) エッチング・ドライポイント・ビュラン/158×130mm/1648年  
8. アダムとエバ(B. 28) エッチング/163×115mm/1638年  
9. 天使をもてなすアブラハム(B. 29) エッチング・ドライポイント/158×131mm/1656年  
10. ハガルとイシマエルを追い出すアブラハム(B. 30) エッチング・ドライポイント/125×96mm/1637年  
11. ベニヤミンを愛撫するヤコブ(B. 33) エッチング/119×88mm/1937年頃  
12. アブラハムとイサク(B. 34) エッチング・ビュラン/153×127mm/1645年  
13. アブラハムの犠牲(B. 35) エッチング・ドライポイント/156×131mm/1655年  
14. 夢の話をするヨセフ(B. 37) エッチング/111×83mm/1638年  
15. ヤコブに渡されたヨセフの上衣(B. 38) エッチング・ドライポイント/107×80mm/1633年頃  
16. モルデカイの勝利(B. 40) エッチング・ドライポイント/171×214mm/1641年頃  
17. 祈るダビデ(B. 41) エッチング・ドライポイント/142×92mm/1652年  
18. 盲目のトビト(B. 42) エッチング・ドライポイント/161×129mm/1651年  
19. 羊飼いの前に現われた天使(B. 44) エッチング・ビュラン・ドライポイント/260×217mm/1634年  
20. ランプに照らされた羊飼いの礼拝(B. 45) エッチング/105×128mm/1654年頃  
21. 馬小屋でのキリストの割礼(B. 47) エッチング・ビュラン/95×144mm/1654年  
22. キリストの割礼(小版)(B. 48) エッチング・ドライポイント/87×63mm/1630年頃  
23. 神殿への奉獻(横長の版)(B. 49) エッチング・ドライポイント/213×289mm/1639年頃  
24. 神殿への奉獻(暗色法)(B. 50) エッチング・ドライポイント/209×160mm/1654年頃  
25. エジプト逃避(小版)(B. 52) エッチング/88×61mm/1633年

- E. 26. エジプト逃避(夜の場面)(B. 53, 第1ステート) エッチング・ビュラン・ドライポイント/126×110mm/1651年  
27. エジプト逃避(夜の場面)(B. 53, 第3ステート) エッチング・ビュラン・ドライポイント/126×110mm/1651年  
28. エジプト逃避(ヘルキュレス・セーヘルスの版画の改変)(B. 56) エッチング・ビュラン・ドライポイント/201×279mm/1653年頃  
29. エジプト逃避途上の休息(B. 58) エッチング・ドライポイント/129×114mm/1645年  
30. 両親とともに神殿から帰るキリスト(B. 60) エッチング・ドライポイント/96×144mm/1654年  
31. 雲の中の聖母子(B. 61) エッチング・ドライポイント/168×108mm/1641年  
32. 猫のいる聖母子(B. 63) エッチング/95×143mm/1654年  
33. 座って博士たちと議論するキリスト(B. 64) エッチング/95×143mm/1654年  
34. 博士たちと議論するキリスト(スケッチ)(B. 65) エッチング・ドライポイント/125×214mm/1652年  
35. 説教するキリスト(“ラ・プティト・トンプ”)(B. 67) エッチング・ビュラン・ドライポイント/152×202mm/1652年頃  
36. 神殿から両替屋を追い出すキリスト(B. 69) エッチング/135×168mm/1635年  
37. 病者を癒すキリスト(“百グルデン版画”)(B. 74) エッチング・ドライポイント・ビュラン/279×380mm/1649年  
38. ゲツセマネの園での苦悩(B. 75) エッチング・ドライポイント/110×82mm/1657年頃  
39. 民衆の前に引き出されたキリスト(B. 76, 第5ステート) ドライポイント/357×454mm/1655年  
40. 民衆の前に引き出されたキリスト(B. 76, 第7ステート) ドライポイント/356×454mm/1655年  
41. 三本の十字架(B. 78, 第3ステート) ドライポイント・ビュラン/384×449mm/1653年  
42. 三本の十字架(B. 78, 第4ステート) ドライポイント・ビュラン/375×446mm/1660年頃  
43. 二人の盗賊の間に十字架にかけられたキリスト(楕円形)(B. 79) エッチング・ドライポイント/133×99mm/1641年頃  
44. 十字架降下(スケッチ)(B. 82) エッチング・ドライポイント/143×115mm/1642年  
45. たいまつに照らされた十字架降下(B. 83) エッチング・ドライポイント/207×161mm/1654年  
46. 墓に運ばれるキリスト(B. 84) エッチング・ドライポイント/131×105mm/1645年頃  
47. キリストの埋葬(B. 86, 第1ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/209×158mm/1654年頃  
48. キリストの埋葬(B. 86, 第3ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/209×158mm/1654年頃  
49. キリストの埋葬(B. 86, 第4ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/209×158mm/1654年頃  
50. エマオのキリスト(B. 87) エッチング・ビュラン・ドライポイント/211×160mm/1654年  
51. 使徒の前に現われたキリスト(B. 89) エッチング/160×209mm/1656年  
52. 放蕩息子の帰宅(B. 91) エッチング/156×135mm/1636年  
53. 洗礼者ヨハネの斬首(B. 92) エッチング・ドライポイント/127×112mm/1640年  
54. 聖母の死(B. 99) エッチング・ドライポイント/390×310mm/1639年  
55. イタリアの風景のなかで読書する聖ヒエロニムス(B. 104) エッチング・ビュラン・ドライポイント/256×200mm/1653年頃  
56. フェニックス あるいは 倒された立像(B. 110) エッチング・ドライポイント/178×182mm/1658年  
57. 幸運の船(B. 111) エッチング/111×166mm/1633年  
58. メディア あるいは イアソンとクレウーサの結婚(B. 112) エッチング・ドライポイント/231×176mm/1648年  
59. ライオン狩り(大)(B. 114) エッチング・ビュラン/224×299mm/1641年  
60. ライオン狩り(小)(B. 116) エッチング/156×116mm/1629年頃  
61. ねずみ取り屋(B. 121) エッチング・ビュラン/138×124mm/1632年  
62. パンケーキを焼く女(B. 124) エッチング/109×78mm/1635年  
63. ゴルフに興じる男(B. 125) エッチング・ビュラン/96×142mm/1654年  
64. 豚(B. 157) エッチング・ドライポイント/142×178mm/1643年  
65. 戸口で施しを受ける乞食(B. 176) エッチング・ビュラン・ドライポイント/164×127mm/1648年  
66. モデルを写生する画家(B. 192) エッチング・ドライポイント・ビュラン/231×184mm/1639年頃  
67. ストーフのそばに座る半裸の女(B. 197, 第3ステート) エッチング・ビュラン・ドライポイント/226×186mm/1658年

- E. 68. ストーヴのそばに座る半裸の女 (B. 197, 第7ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/226×186mm/1658年
69. 矢をもつ女 (B. 202) エッチング・ドライポイント・ビュラン/204×123mm/1661年
70. シックス橋 (B. 208) エッチング/129×224mm/1645年
71. オンファルの風景 (B. 209) エッチング・ドライポイント/184×225mm/1645年
72. 狩人と犬のいる風景 (B. 211) エッチング・ドライポイント/127×156mm/1653年頃
73. 三本の木 (B. 212) エッチング・ドライポイント・ビュラン/213×278mm/1643年
74. 道沿いに三軒の切妻造りの農家のある風景 (B. 217) エッチング・ドライポイント/160×203mm/1650年
75. 農家と干し草小屋のある風景 (B. 225) エッチング/128×321mm/1641年
76. 運河沿いの農家 (B. 228) エッチング/138×209mm/1645年頃
77. 風車 (B. 233) エッチング/144×207mm/1641年
78. 十字架の鎖をつけた机の前の男 (B. 261) エッチング・ドライポイント/138×111mm/1641年
79. 東方の毛皮の帽子と衣装をつけたひげの男 (B. 263) エッチング・ビュラン/145×129mm/1631年
80. 説教師ヤン・コルネリス・シルフィウス (B. 266) エッチング/165×141mm/1633年
81. サミュエル・メナセ・ベン・イスラエル (B. 269) エッチング/148×107mm/1636年
82. ファウスト (B. 270) エッチング・ドライポイント・ビュラン/208×160mm/1652年頃
83. 説教師コルネリス・クラスゾーン・アンスロ (B. 271) エッチング・ドライポイント/185×155mm/1641年
84. 版画商クレメント・デ・ヨンゲ (B. 272) エッチング・ドライポイント・ビュラン/206×158mm/1651年
85. トマス・ハーリング(“老ハーリング”) (B. 274) ドライポイント・ビュラン/194×145mm/1655年頃
86. ピーテル・ハーリング(“小ハーリング”) (B. 275) エッチング・ドライポイント・ビュラン/196×150mm/1655年
87. 金細工師ヤン・ルトマ (B. 276) エッチング・ドライポイント/190×147mm/1656年
88. 画家ヤン・アセリン (B. 277, 第1ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/195×170mm/1647年
89. 画家ヤン・アセリン (B. 277, 第2ステート) エッチング・ドライポイント・ビュラン/183×168mm/1647年頃
90. ユダヤ人医師エフライム・ボヌス (B. 278) エッチング・ドライポイント・ビュラン/239×177mm/1647年
91. 説教師ヤン・コルネリス・シルフィウス (B. 280) エッチング・ドライポイント・ビュラン/277×187mm/1646年
92. 能筆家リーフェン・ウィレムスゾーン・ファン・コッペノール (B. 283) エッチング・ドライポイント・ビュラン/335×278mm/1658年頃
93. ヤン・シックス (B. 285) エッチング・ドライポイント・ビュラン/240×189mm/1647年
94. ユダヤの花嫁(大) (B. 340) エッチング・ドライポイント・ビュラン/217×167mm/1635年
95. テーブルの前に座る画家の母 (B. 343) エッチング/146×130mm/1631年頃
96. 真珠の髪飾りをつけたサスキア (B. 347) エッチング/85×66mm/1634年
97. 東方のかぶり物をつけて座る画家の母 (B. 348) エッチング/146×129mm/1631年
98. 画家の母、頭部と胸部 (B. 354) エッチング/66×63mm/1628年
99. 画家の頭部や乞食などの習作 (B. 363) エッチング/98×104mm/1632年頃
100. サスキアらの頭部の習作 (B. 365) エッチング/150×125mm/1636年



展覧会ポスター



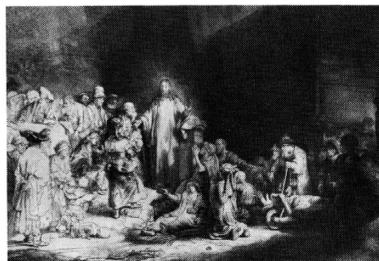
P.10



P.1



E.19



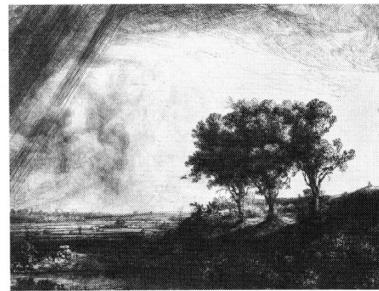
E.37



P.5



E.41



E.73

---

## 《地方展他》

ブリヂストン美術館開館30周年記念の《レンブラント展》開催を機に、当館所蔵作品の地方巡回展を行なった。

---

近代フランス美術と日本の巨匠たち

### ブリヂストン美術館名作展

1982年9月4日(土)―10月3日(日)(月曜休館/26日間)

会場：京都市美術館

主催：京都市/京都新聞社/KBS京都/石橋財団ブリヂストン美術館

後援：京都府/滋賀県/京都市・大津市各教育委員会/久留米・石橋美術館

出品内容：フランス絵画68点，日本絵画29点，彫刻17点

入場者総数：74,030人

---

近代ヨーロッパ美術の精華

### ブリヂストン美術館名品展

1982年10月8日(金)―31日(日)(月曜休館/21日間)

会場：浜松市美術館

主催：浜松市美術館/石橋財団ブリヂストン美術館/中日新聞社

後援：静岡県教育委員会

出品内容：フランス絵画68点，彫刻17点

入場者総数：44,733人

---

ブリヂストン美術館所蔵品にみる

### 日本近代洋画の歩み

1982年10月8日(金)―11月7日(日)(木曜休館/27日間)

会場：佐野美術館

主催：(財)佐野美術館/石橋財団ブリヂストン美術館/三島市/三島市教育委員会

出品内容：日本絵画73点

入場者数：10,484人

---

アクシスギャラリーにてジャポニスム展開催

19世紀末のヨーロッパ版画より

### 世紀末美術と日本趣味

1982年9月1日(水)ー9月12日(日)

会場：アクシスギャラリー

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

後援：株式会社アクシス

出品内容：西洋版画79点

#### アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック(1864—1901)

1. ムーラン=ルージュのポスター リトグラフ/171×124cm/1891年
2. ムーラン=ルージュにて リトグラフ/45.8×34.7cm/1892年
3. カルナヴァル リトグラフ/25.8×16.6cm/1894年
4. アンパサドゥールにて リトグラフ/30.2×24.6cm/1894年
5. 『ドイツのバビロン』のポスター リトグラフ/124×87.5cm/1894年
6. 『シルベリク』でポレロを踊るランデ リトグラフ/37.2×26.5cm/1895年
7. 『苦しい時代』のヤースとアントワヌ リトグラフ/32×28.5cm/1895年
8. エグランティヌ嬢一座 リトグラフ/61.5×80cm/1896年
9. 騎手 リトグラフ/52×37cm/1896年
10. 『レスタンプ・オリジナル』表紙 リトグラフ/56.5×64cm/1893年

#### エミール・ベルナル(1868—1941)

11. 磔刑 木版/35.5×15cm/1894年

#### フェリックス・ブラックモン(1833—1914)

12. ツアー万歳 エッチング/33×23cm/1893年

#### ウジェーヌ・カリエール(1849—1906)

13. ネリー・カリエール リトグラフ/47×36cm/1895年

#### ウォルター・クレイン(1845—1915)

14. シンバルを持つ踊り子 リトグラフ/43.5×31cm/1894年

#### ウジェーヌ・ドラートル(1864—1939)

15. ユイスマンス像 色エッチング・アクアチント・ルーレット  
/32.4×24.3cm/1894年

#### モーリス・ドニ(1870—1943)

16. マドレーヌ(2つの顔) リトグラフ/30.2×25.2cm/1893年

#### アンリ・ファンタン=ラトゥール(1836—1904)

17. 聖アントニウスの誘惑 リトグラフ/32.5×40.5cm/1893年

#### オーギュスト・ルベール(1849—1918)

18. 洗濯女 ソフトグランドエッチング・アクアチント/39×23cm/1893年

#### カミーユ・マルタン(1861—1898)

19. 『レスタンプ・オリジナル』表紙 リトグラフ/58×85cm/1894年

#### シャルル・モーラン(1856—1914)

20. トゥールーズ=ロートレックの肖像 アクアチント/23×13.3cm/1893年

#### エルマン・ポール(1864—1940)

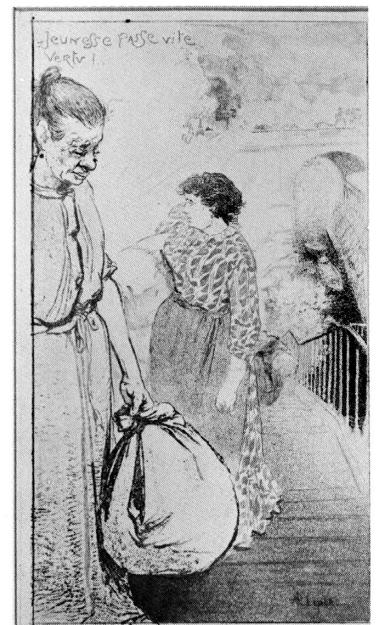
21. 帽子屋の女たち リトグラフ/24.5×35.5cm/1894年

#### オディロン・ルドン(1840—1816)

22. 耳 リトグラフ/27×25cm/1895年

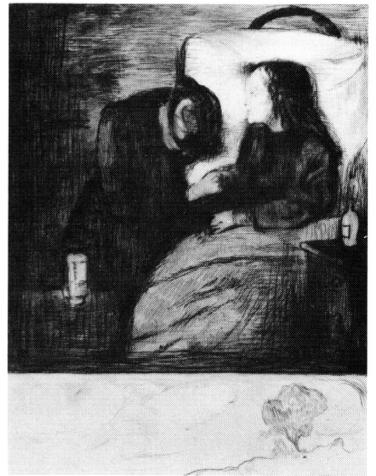


2



18

23. 仏陀 リトグラフ/31.7×25cm/1895年  
**チャールズ・リケッツ**(1866—1931)
24. 洪水 木版/9×9.5cm/1894年  
**フェリシアン・ロプス**(1833—1898)
25. 悲しみの母 エッチング・ドライポイント/15.1×10.3cm/1893年  
**ポール・シニャック**(1863—1935)
26. サン=トロペ リトグラフ/27.5×37cm/1894年  
**フェリックス・ヴァロトン**(1865—1925)
27. デモンストレーション 木版/20.5×32.2cm/1893年
28. 入浴 木版/18×22.5cm/1894年  
**エドゥアール・ヴイヤール**(1868—1946)
29. 室内 リトグラフ/29×23.5cm/1893年  
**オディロン・ルドン**(1840—1916)
30. 習作 リトグラフ/30×24.5cm/1900年  
**アンリ・リヴィエール**(1864—1951)
31. プルターニュの海 木版/23.3×34.5cm/1890年頃
32. ノートル=ダム楼 upper リトグラフ/52.5×81.5cm/1900年  
**ルイ・アンクタン**(1861—1932)
33. 『ル・リール』のポスター リトグラフ/143×109cm/1894年  
**エドゥヴァルト・ムンク**(1863—1944)
34. 病める少女 ドライポイント・ルーレット/36.1×26.9cm/1894年
35. 病める少女 エッチング・ドライポイント/12.7×16.8cm/1896年  
**フェリシアン・ロプス**(1833—1898)
36. 老いたるカトリーヌ エッチング/20.5×14.4cm/1895年頃  
**ゲオルク・リュールヒ**(1868— ?)
37. デーメル酒の歌のための縁飾り リトグラフ/30.3×22.1cm/1895年頃  
**フェリックス・ヴァロトン**(1865—1925)
38. ローベルト・シューマンの肖像 木版/15.1×12.2cm/1893年  
**モーリス・デュモン**( ? — ?)
39. サッフオー グリフトグラフ/12×19.1cm/1895年頃  
**エルンスト=モーリツ・ガイガー**(1861—1941)
40. 巨人 エッチング/28.8×21.8cm/1895年頃  
**オットー・エックマン**(1865—1902)
41. 春訪れなば リトグラフ/25×11cm/1895年頃
42. アイリス 木版/21.7×12.5cm/1895年頃  
**エドムント・クロッツ**(1855— ?)
43. 少女の顔 エッチング/11.3×14.9cm/1895年頃  
**アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック**(1864—1901)
44. マルセル・ランデ嬢 リトグラフ/32.5×24.6cm/1895年  
**ヤーコプ・G・フェルトヘール**(1866— ?)
45. 無題 木版/27.8×20.5cm/1896年頃  
**フランツ・スカルピーナ**(1849—1910)
46. 雨の辻馬車 リトグラフ/24.5×22.4cm/1896年頃  
**アンデルス・ツォルン**(1860—1920)
47. ポール・ヴェルレーヌ エッチング/23.2×15.8cm/1895年



34



41



44

シャルル・モーラン(1856—1914)

48. 母と子 エッチング/24.4×17.9cm/1896年頃

マックス・クリンガー(1857—1920)

49. 追憶 エッチング/24.9×11.9cm/1896年頃

オットー・グライナー(1869—1916)

50. ゴルゴタ エッチング/20.1×25.9cm/1896年頃

マックス・ビーチュマン(1865— ? )

51. 男女のケンタウロス エッチング/24.5×16.4cm/1896年頃

ハンス・ウンガー(1872—1936)

52. 女の顔の習作 リトグラフ/27.6×20.8cm/1896年頃

ゲオルグ・リュウリヒ(1868— ? )

53. フレイアと巨人たち リトグラフ/24.9×20.1cm/1896年頃

ヴィルヘルム・フォルツ(1855—1901)

54. サロメ リトグラフ/27.2×18.7cm/1896年頃

オイゲン・キルヒナー(1865— ? )

55. 11月 エッチング/31.1×18.9cm/1896年頃

オットー・エックマン(1865—1902)

56. 五位鷲 木版/13.7×24.5cm/1895年頃

アルトゥール・イリース(1870—1953)

57. 月の出 エッチング/31.1×18.9cm/1896年頃

ルートヴィヒ・フォン・ホフマン(1861—45)

58. アダムとエヴァ リトグラフ/25.2×19.5cm/1897年頃

ヴィルヘルム・ライプ(1844—1900)

59. 老婆の像 エッチング/18.1×13.7cm/1897年頃

ウィリアム・ニコルソン(1872—1949)

60. 老婆 木版/24.5×9.5cm/1897年頃

モーリス・ドニ(1870—1943)

61. 母と子 リトグラフ/24.4×17.4cm/1897年頃

オーギュスト・ロダン(1840—1917)

62. アントナン・ブルーノ エッチング/11.4×7cm/1897年頃

ルートヴィヒ・フォン・ホフマン(1861—1945)

63. うららかな日 リトグラフ/17.5×28.4cm/1897年頃

レオポルト・グラーフ・フォン・カルクロイト(1855—1928)

64. 帰宅 リトグラフ/19×19cm/1897年頃

アンリ・エラン(1854— ? )

65. 戯れる人魚 木版・リトグラフ/28.9×20.4cm/1897年頃

ポール・シニャック(1863—1935)

66. 夕暮れ リトグラフ/19.5×25.5cm/1898年頃

マクシミリアン・リュス(1858—1941)

67. 溶鉱炉 リトグラフ/26×20.9cm/1898年頃

イポリット・プティジャン(1854—1929)

68. 装飾下絵 リトグラフ/26×20cm/1898年頃

アンリ・エドモン・クロス(1856—1910)

69. シャンゼリゼで リトグラフ/23×26cm/1898年頃

アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(1863—1957)

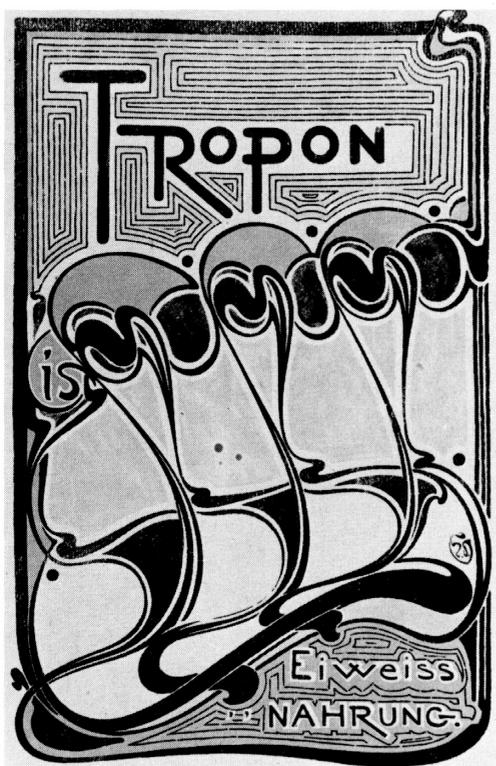


55



60

70. 「トロポン」の広告 リトグラフ/30.8×19.8cm/1898年頃  
 ヴァルター・ライスティコウ(1865—1908)
71. 鶴 アルミニウム平版/21.8×27.9cm/1898年  
 ヴィルヘルム・フォルツ(1855—1901)
72. ニンフの行進と踊り リトグラフ/10.2×20.9cm/1898年頃  
 アルベルト・クリューガー(1858— ? )
73. ヤーコブ・ブルクハルト 木版/9.6×8.5cm/1897年  
 ベーター・ペーレンス(1868—1940)
74. 接吻 木版/27.1×21.5cm/1896—97年頃  
 ハンス・フォン・フォルクマン(1860—1927)
75. 礼拝堂 リトグラフ/23.6×19.4cm/1898年頃  
 マックス・リーパーマン(1847—1935)
76. 薪を集める女たち リトグラフ/16.7×28.9cm/1899年頃  
 ハンス・オルデ(1855—1917)
77. フリードリヒ・ニーチェ エッチング/16.9×12.4cm/1899年頃  
 ベーター・ペーレンス(1868—1940)
78. 冬景色 木版/26.5×21.1cm/1899年頃  
 アルフォンス・ミュシャ(1860—1939)
79. 「ジョブ」のポスター リトグラフ/140.4×94cm/1898年



70



74

---

## 《その他の記録》

ブリヂストン美術館開館30周年記念事業の一環として、当館所蔵作品により構成されたビデオ・テープを制作した。

〈ビデオ・テープ〉

石橋財団ブリヂストン美術館30周年記念

**印象派の展開—フランスの巨匠たち—**

原案/

ブリヂストン美術館学芸部

製作スタッフ/

製作：高場隆夫

脚本・演出：松川八洲雄

撮影：瀬川順一

照明：外山透

ナレーター：向後英紀

音楽：間宮芳生

制作：石橋財団

ミトモプロダクション

---

1982年度分として上記ビデオ・テープを、山梨県を含む関東全域、および美術館創立者故石橋正二郎の出身地方である九州全域(沖縄県を含む)の高校のうち、希望校1,076校に寄贈した。

《土曜講座》

通算回数	月日	講座題目	講師
<b>《第9回ギリシャの文化と美術——ギリシャの美術館(Ⅱ)》(昨年度からのつづき)</b>			
1268	1982年 4月3日 (4)	スパルタ美術館——尚武の証し	前田正明氏
1269	4月10日 (5)	テッサロニケ美術館——北ギリシャの至宝	木戸雅子氏
1270	4月17日 (6)	ロードス美術館——十字軍騎士団の島	松島道也氏
1271	4月24日 (7)	ベナキ美術館——ビザンティン美術の華	ジェースン・ルソー氏
<b>《現代美術——ヨーロッパとアメリカ》</b>			
1272	5月1日 (1)	〈特別講演会〉イタリア美術・1918～1940—未来派とその発展—ピア・ヴィヴァレルリ氏 通訳 古川上子氏	
1273	5月8日 (2)	第二次大戦後の美術——フランスと日本	針生一郎氏
1274	5月15日 (3)	フランス現代美術に見るものと精神	大岡 信氏
1275	5月22日 (4)	〈特別講演会〉分割主義から未来派へ	ジョアンナ・ピアントーニ氏 通訳 古川上子氏
1276	5月29日 (5)	イギリス現代美術とパリ・ニューヨーク	木島俊介氏
1277	6月5日 (6)	アメリカ美術の高揚と拡散——ジャスパー・ジョーンズ以後—東野芳明氏	
1278	6月12日 (7)	アメリカにおける日本人画家——国吉康雄と石垣栄太郎——阿部信雄	
1279	6月19日 (8)	戦後のイギリス美術と自然	岡田隆彦氏
<b>《ジャポネズリー研究会夏期連続講演会——東西文化交流の立役者》</b>			
1280	7月3日 (1)	特派記者としてのワーグマン	金井 圓氏
1281	7月10日 (2)	フェノロサ——日本古画の収集と研究	山口静一氏
1282	7月17日 (3)	海を渡る浮世絵——林忠正の生涯	定塚武敏氏
1283	7月24日 (4)	ゴントールのジャポニスム	斎藤一郎氏
1284	7月31日 (5)	絵で書いた日本人論——ビゴアの描いた世界——	清水 勲氏
1285	8月7日 (6)	岡倉天心——伝統と近代の架橋者	陰里鉄郎氏



---

## 主な記録 石橋美術館

### 《特別展》

---

#### 坂本繁二郎展

1982年7月10日—8月22日(月曜休館/38日間)

主催：石橋財団石橋美術館/朝日新聞社/西日本新聞社

出品内容：油彩114点、水彩15点、その他6点 計135点

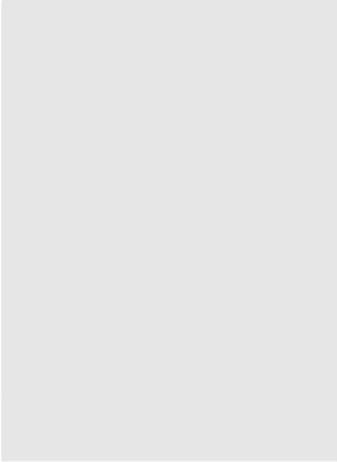
入場者総数：41,687人

---

1. 立石谷 水墨、絹本/143.4×82.5cm/1897年
2. 秋の朝日 油彩、紙/26.4×35.2cm/1899年
3. 大島の一部 油彩、画布/116.1×72.8cm/1906年(福岡市美術館蔵)
4. 北茂安村の一部 油彩、画布/143.9×136.5cm/1907年
5. 新聞 油彩、画布/80.5×60.7cm/1910年
6. うすれ日 油彩、画布/71.4×116.4cm/1912年
7. 魚を持って来た海女 油彩、画布/117×80.5cm/1913年(石橋美術館蔵)
8. 人参畑 油彩、画布/61×80.8cm/1914年
9. 豚 油彩、画布/56.1×56.2cm/1915年(東京国立近代美術館蔵)
10. 三月頃の牧場 油彩、画布/60.9×80.4cm/1915年
11. 国道筋 油彩、画布/59×78.5cm/1916年
12. 馬 油彩、画布/72.9×117cm/1916—41年
13. 髪洗 油彩、画布/80×60.7cm/1916年(大原美術館蔵)
14. 静物 油彩、画布/45.3×60.4cm/1918年(石橋美術館蔵)
15. 牛 油彩、画布/71×116.5cm/1920年(石橋美術館蔵)
16. 静物 油彩、画布/45.7×53.2cm/1921年
17. ヴィラ・グルネー 油彩、画布/33.3×41.1cm/1922年(ひろしま美術館蔵)
18. ヴィラ・クラマルト 油彩、画布/31.9×41cm/1922年
19. キャンペレ 油彩、画布/33×41.0cm/1922年
20. ポルテ・ジャンチー 油彩、画布/31.9×40.9cm/1922年
21. 静物 油彩、画布/65.3×80.5cm/1922年
22. 少女 油彩、画布/41.2×33.3cm/1922年(石橋美術館蔵)
23. 少女 油彩、画布/41×33cm/1922年
24. 読書 油彩、画布/41×31.9cm/1923年(石橋美術館蔵)
25. 婦人像 油彩、画布/81×64.8cm/1922—68年
26. 巴里郊外 油彩、画布/53.4×65.4cm/1923年(石橋美術館蔵)
27. クロアジック村 油彩、画布/31.8×40.9cm/1923年
28. ヴァンヌ郊外 油彩、画布/33×40.8cm/1923年
29. プルターニュ 油彩、画布/45.9×54.8cm/1923年(加藤近代美術館蔵)
30. 帽子を持てる女 油彩、画布/80.6×65.3cm/1923年(石橋美術館蔵)
31. 眠れる少女 油彩、画布/41×33.2cm/1923年
32. 裸婦習作 油彩、画布/53.6×37.6cm/1923年
33. 老婆 油彩、画布/80.2×65.4cm/1923年
34. 老婆習作 油彩、板/41×32.1cm/1923年
35. 巴里の乞食 グワッシュ、紙/27×19.7cm/1923年
36. 巴里の乞食 油彩、画布/40×32.8cm/1923年
37. 家政婦 油彩、画布/80.6×100.2cm/1923—27年
38. 柿 油彩、画布/45.8×61cm/1925年
39. 松 油彩、画布/44.5×52cm/1926年
40. 放水路の雲 油彩、画布/38×45.5cm/1927年
41. 母の像 油彩、画布/52.9×45.8cm/1927年

42. 桃 油彩, 板 23.5×33cm/1928年
43. 自画像(自画鏡像) 油彩, 紙/45.5×38cm/1929年(石橋美術館蔵)
44. 母仔馬 油彩, 画布/71.2×116.8cm/1930年
45. 黄馬 油彩, 画布/45.5×60.5cm/1930年(大原美術館蔵)
46. 自像 油彩, 画布/52.6×45cm/1930年(石橋美術館蔵)
47. 放牧三馬 油彩, 画布/80.5×100cm/1932年(石橋美術館蔵)
48. 鳶形山 油彩, 板/23.1×33cm/1932年
49. 柿 油彩, 板/23.8×33cm/1932年
50. 繫馬 油彩, 画布/91.3×117cm/1934年(ひろしま美術館蔵)
51. 松山 油彩, 画布/45.7×53.3cm/1935年
52. 二仔馬 油彩, 画布/80.5×100cm/1935年
53. 耕作白馬 油彩, 画布/45×52.8cm/1936年
54. 放牧二馬 油彩, 画布/91×116.5cm/1936年
55. 水より上る馬 油彩, 画布/80×116.2cm/1937年(東京国立近代美術館蔵)
56. 既の白馬 油彩, 画布/30.9×39.9cm/1937年
57. 林間馬 油彩, 画布/50×60cm/1938年
58. 松間馬 油彩, 画布/90.8×116.8cm/1938年
59. 三仔馬 油彩, 画布/41×53cm/1938年
60. 母仔馬 油彩, 画布/22.2×15.8cm/1939年
61. 柿と栗 油彩, 画布/31.8×40.9cm/1939年
62. 窓の馬 油彩, 画布/31.6×41.2cm/1940年
63. 林檎と馬鈴薯 油彩, 画布/45.4×53.1cm/1940年
64. 水上牛馬 油彩, 画布/31.9×41.2cm/1940年
65. 柿 油彩, 画布/32×41cm/1941年
66. 甘藍 油彩, 画布/80.4×100.1cm/1941年(大分県立芸術会館蔵)
67. 柿 油彩, 画布/31.7×41cm/1941年
68. 鶏卵 油彩, 画布/38.2×45.6cm/1942年
69. 南瓜 油彩, 画布/50.2×60.8cm/1942年
70. 烏瓜 油彩, 画布/32×41.2cm/1942年
71. 砥石 油彩, 画布/45.6×53.3cm/1943年
72. 壁画下図 油彩, 画布/50×60.8cm/1943年(京都国立近代美術館蔵)
73. 梨 油彩, 画布/38.2×45.5cm/1944年
74. 柿 油彩, 画布/45.5×52.9cm/1944年(ブリヂストン美術館蔵)
75. 煉瓦と瓦 油彩, 画布/45.5×53cm/1944—50年
76. 八女風景 油彩, 画布/32×41.4cm/1946年
77. 能面と謡本 油彩, 画布/45.5×53cm/1946年
78. 香盒 油彩, 画布/31.9×41.2cm/1947年
79. 林間馬 油彩, 画布/45.5×53cm/1947年
80. 本とローソク 油彩, 画布/30.9×40cm/1947年
81. 盆 油彩, 画布/38.3×45.4cm/1948年
82. 鮭 油彩, 画布/41.1×60.8cm/1949年(福岡市美術館蔵)
83. 炭斗 油彩, 画布/32×41.1cm/1949年
84. 林檎 油彩, 画布/32×41cm/1950年
85. 能面 油彩, 画布/49.2×60.2cm/1950年
86. 馬 油彩, 画布/80.5×100cm/1951年
87. 能面と謡本 油彩, 画布/45.5×53cm/1951年
88. モーター 油彩, 画布/61.2×73cm/1952年
89. 水より上る馬 油彩, 画布/72×116.2cm/1953年

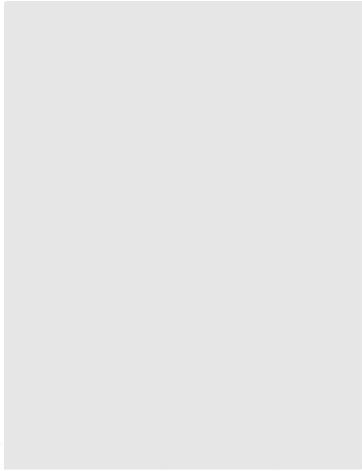
90. 暁明の根子獄 油彩, 画布/60.8×72.8cm/1953年(国立公園協会蔵)
91. 壁 油彩, 画布/68×47.9cm/1954年
92. 能面 油彩, 画布/38×45.5cm/1954年
93. 能面 油彩, 画布/33.5×49.5cm/1955年
94. 雲仙の春・阿蘇の秋 油彩, 画布/六曲一双(各)104.5×343cm/1934—41—57年
95. 瘦男と中将面 油彩, 画布/37.5×45.5cm/1959年
96. 箱 油彩, 画布/45.5×53cm/1959年(八女市役所蔵)
97. 植木鉢 油彩, 画布/38.3×45.5cm/1959年(久留米市立篠山小学校蔵)
98. 菊慈童と中将面 油彩, 画布/32×41.3cm/1959年
99. 母仔馬 油彩, 画布/38.4×45.7cm/1960年
100. 箱 油彩, 画布/38×45.7cm/1960年(三重県立美術館蔵)
101. 毛糸 油彩, 画布/38×45.9cm/1960年
102. 能面と鼓の胴 油彩, 画布/45.5×53.2cm/1962年
103. 鼓胴と能面 油彩, 画布/37.2×44.8cm/1962年
104. 月 油彩, 板/33.3×24.2cm/1964年
105. 鉢 油彩, 画布/31.8×40.7cm/1964年
106. 達磨 油彩, 画布/45.5×53.1cm/1964年
107. 牛 油彩, 画布/60.5×80.3cm/1919—65年
108. 月 油彩, 画布/60.5×73cm/1966年
109. 月 油彩, 画布/50.3×60.4cm/1967年
110. 櫛の月 油彩, 画布/38.2×45.5cm/1967年
111. 馬市行 油彩, 画布/32×40.8cm/1967年
112. 月光 油彩, 画布/38×45.6cm/1968年
113. 白い牛 油彩, 画布/50×61cm/1969年
114. 八女の月 油彩, 画布/41×32cm/1969年
115. 幽光 油彩, 画布/31.7×41cm/1969年
116. 水繩山風景 水彩, 紙/56.5×74.5cm/1898年
117. 風景 水彩, 紙/32.8×50cm/1905年
118. 路傍 木炭, 紙/36.5×57.1cm/1916年
119. 母子 木炭, 紙/35.5×47cm/1916年
120. 山羊のいる風景 水彩, 紙/60.4×45.4cm/1918年
121. ヴァンヌ風景 水彩, 紙/18×26cm/1923年頃(北九州市立美術館蔵)
122. 自画像 パステル, 紙/27.7×21.9cm
123. 自画像 鉛筆;水彩, 紙/15.4×11.2cm
124. 九重山放牧 水彩, 紙/14.7×21.8cm/1928年
125. 林間馬 水彩, 紙/17.4×12.5cm/1935年
126. 松間馬 水彩, 紙/14×15.8cm/1935年
127. 仔馬 水彩, 紙/17×11.6cm/1935年
128. 水より上る馬 水彩, 紙/14.2×23.1cm/1935年
129. 牛 水彩, 紙/14×22.9cm/1935年
130. 松間馬 水彩, 紙/14.2×18.1cm/1936年
131. 馬 水彩, 紙/15.9×23.5cm/1938年
132. 母仔馬 水彩, 紙/14.1×23cm/1939年
133. 馬 水彩, 紙/14.1×22.3cm/1950—51年
134. 月 水彩, 紙/22.9×15.9cm//1964年
135. 夏野 油彩, 画布/71×116cm/1898年



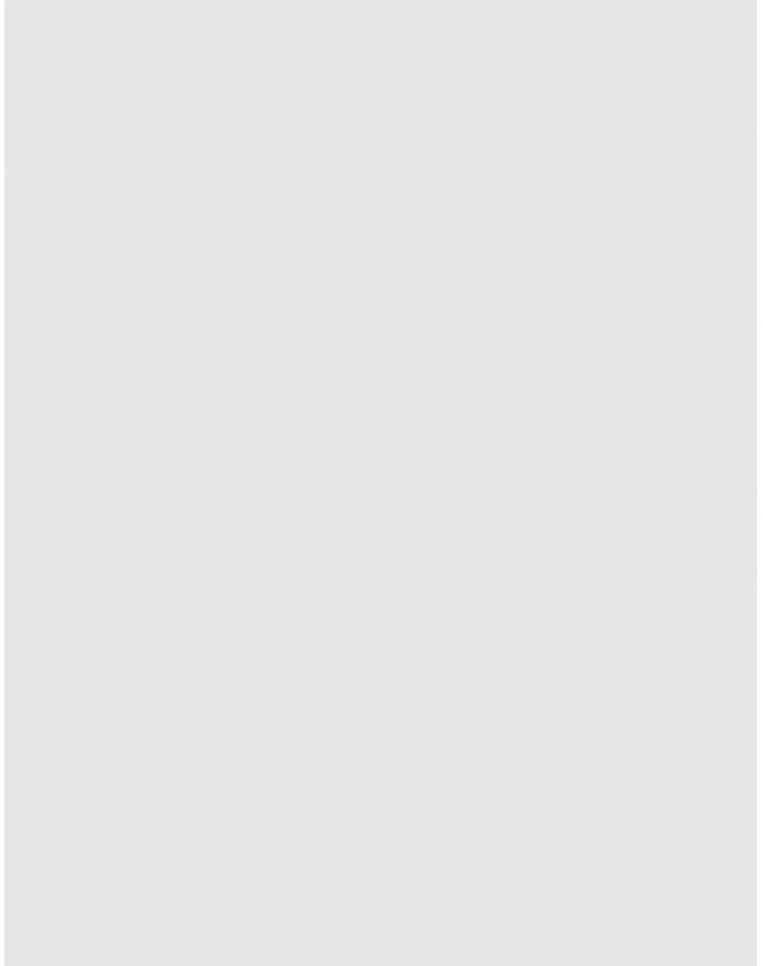
展覧会ポスター



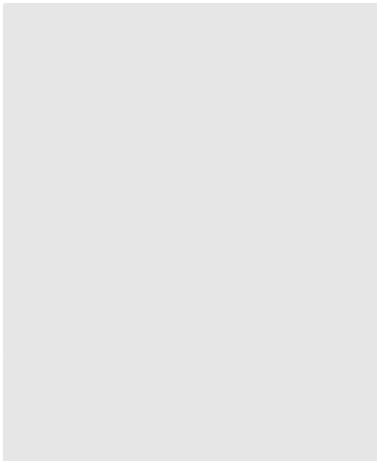
15



5



30



22

## 青木 繁=明治浪漫主義とイギリス

1983年3月5日(土)―3月31日(木)(月曜休館/24日間)

主催：石橋財団石橋美術館/西日本新聞社/テレビ西日本

後援：外務省/文化庁/ブリティッシュ・カウンシル

協力：英国航空

出品内容：青木 繁：油彩30点、水彩12点、素描10点；イギリス絵画：油彩14点、水彩6点；その他 10点、参考出品5点  
計87点

入場者総数：13,519人

### 青木 繁(1882—1911)

1. 自画像 油彩、画布/81×60.5cm/1903年(石橋美術館蔵)
2. 輪転 油彩、画布/27.3×37.6cm/1903年(石橋美術館蔵)
3. 享楽 油彩、板/33.3×23.3cm/1903年(大原美術館蔵)
4. 享楽 油彩、板/33.3×23.3cm/1904年(大原美術館蔵)
5. 天平時代 油彩、画布/46×76.5cm/1904年(ブリヂストン美術館蔵)
6. 海の幸 油彩、画布/69×181.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
7. 海 油彩、板/10.3×15cm/1904年(石橋美術館蔵)
8. 海景(布良の海) 油彩、画布/35×71.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
9. 女の顔 油彩、板(羽子板)/33×9.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
10. 農家 油彩、板/23.6×33cm/1904年(石橋美術館蔵)
11. 木立(森の暮色) 油彩、板/33×24cm/1904年(石橋美術館蔵)
12. 男の顔(自画像) 油彩、画布/81×61cm/1904年(大原美術館蔵)
13. 自画像 油彩、ボール紙/33.6×24.6cm/1905年(三重県立美術館蔵)
14. 大穴牟知命 油彩、画布/75×127cm/1905年(石橋美術館蔵)
15. 女星 油彩、羽子板/137×37cm/1906年(宗教法人パーフェクト・リパティ教団蔵)
16. 旧約聖書物語挿絵
  1. 光あれ 油彩、板/23.5×33cm/1906年
  2. 葦舟のモーゼ 油彩、板/24.3×33cm/1906年
  3. 紅海のモーゼ 油彩、板/33×23.5cm/1906年
  4. ヤエル、シセラを斬る 油彩、板/33×23.4cm/1906年
  5. ダビデの聖詠 油彩、画布/32.7×23.6cm/1906年
  6. ソロモン王とエルサレム 油彩、板/23.4×33cm/1906年
  7. ネブカデネザルとダニエル 油彩、板/33×22.9cm/1906年
  8. エステルとハマソ 油彩、板/23.5×33cm/1906年
17. 光明皇后 油彩、画布/38×72.5cm/1906年(石橋美術館蔵)
18. 日本武尊 油彩、画布/70×37cm/1906年(東京国立博物館蔵)
19. 雪景 油彩、板/23.3×32.8cm/1906年(石橋美術館蔵)
20. 幸彦像 油彩、画布/29.8×22.8cm/1907年(栃木県立美術館蔵)
21. わだつみのいろこの宮下絵 油彩、板/33×23.5cm/1907年
22. わだつみのいろこの宮下絵 油彩、画布/70.5×31.8cm/1907年(栃木県立美術館蔵)
23. わだつみのいろこの宮 油彩、画布/181.5×70cm/1907年(石橋美術館蔵)
24. 筑後風景 油彩、画布/81×60.3cm/1908年(東京国立博物館蔵)
25. 月下滞船図 油彩、画布/41.5×57cm/1908年(石橋美術館蔵)
26. 漁夫晩帰 油彩、画布/119×198cm/1908年(清力美術館蔵)
27. 天草風景 油彩、画布/45.5×60cm/1909年(大原美術館蔵)
28. 温泉 油彩、画布/70.8×36cm/1910年
29. 佐賀風景 油彩、板/22.5×30cm/1910年(佐賀県立博物館蔵)

30. 犬 油彩, 画布/32×44cm/1910年
31. 黄泉比良坂下絵 水彩, 紙/22.8×30cm/1903年(福岡市美術館蔵)
32. 黄泉比良坂 水彩, 紙/48×33.3cm/1903年(東京芸術大学蔵)
33. 閻魔弥尼 水彩, 板/15×10.2cm/1903年(石橋美術館蔵)
34. 春 水彩, 紙/16.3×32.3cm/1904年(石橋美術館蔵)
35. 豎琴をもてる女 水彩, 紙/直径11cm/1904年
36. 水浴 水彩, 紙/14×25cm/1904年(石橋美術館蔵)
37. 丘に立つ三人 水彩, 紙/16×14cm/1904年(石橋美術館蔵)
38. 絵かるた
  1. 絵かるた(小野小町) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  2. 絵かるた(在原業平) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  3. 絵かるた(紫式部) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  4. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  5. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6cm/1904年
  6. 絵かるた 水彩, 紙/8.7×11.2cm/1904年
39. 風景 水彩, 絹(扇面)/15×40.5cm/1904年(石橋美術館蔵)
40. 鑪斧(『春鳥集』口絵) 水彩, 紙/14×9.1cm/1905年
41. 春 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年(石橋美術館蔵)
42. 秋 水彩, 襖布/直径44.5cm/1908年(石橋美術館蔵)
43. 汗の妙義山スケッチ行 鉛筆・淡彩, 紙/13×1.8cm(2枚)/1902年
44. 麓より妙義山を望む 鉛筆, 紙/12.3×17.7cm(2枚)/1902年
45. 神塞妙義 鉛筆・淡彩, 紙/14×21.7cm(2枚)/1902年
46. 落葉径 鉛筆・淡彩, 紙/18×13cm(2枚)/1902年
47. 秋の夜 鉛筆, 紙/14.5×16cm/1902年(石橋美術館蔵)
48. 妙義登山戯画 鉛筆・淡彩, 紙/15×23cm/1902年
49. 妙義山金洞第一石門 鉛筆・淡彩, 紙/17.7×13.2cm(2枚)/1902年
50. 黄泉比良坂下絵 赤コンテ, 紙/33×32.5cm/1903年(福岡市美術館蔵)
51. 自画像 色鉛筆, 紙/16.5×11cm/1903年(石橋美術館蔵)
52. 真・善・美 鉛筆, 紙/13.6×4cm(3枚)/1905—06年頃(神奈川県立近代美術館蔵)

#### ジョージ・フレデリック・ワッツ(1817—1904)

53. オルフェウスとエウリュディケ 油彩, 画布/69.9×45.7cm/1869年(アバディーン美術館蔵)
54. カインの罪の告発 油彩, 画布/147×66cm/1871—72年(ワッツ・ギャラリー寄託)
55. ナクソス島のアリアドネ 油彩, 画布/75×96cm/1875年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
56. 希望 パステル, 紙/136×107cm(ワッツ・ギャラリー寄託)

#### ダンテ・ゲイプリエル・ロセッティ(1828—1882)

57. ボルジア家の人々 水彩, 紙/36.2×37.8cm/1863年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
58. ベアトリーチェの挨拶 水彩・ボディカラー, 紙/37×41cm/1863年

#### ジョン・ロッドガム・スペンサー・スタンホープ(1829—1908)

59. 息子達の死を悼むリヅパの習作 油彩, 画布/33.8×21cm/1860年代初(ロンドン, ファイン・アート・ソサエティー蔵)
- #### サー・エドワード・バーン＝ジョーンズ(1833—1898)
60. マーリンとニムエ グワッシュ, 紙/64×50.8cm/1861年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
  61. 愛の歌 グワッシュ, 紙/55.7×78.2cm/1865年(ボストン美術館蔵)
  62. ヴィナスの鏡の習作 油彩, 画布/81.2×127cm/1868年頃(フォープス・マガジン・コレクション蔵)
  63. 少女の頭部の習作 チョーク, テラコッタ紙/34.3×27.9cm/1889年(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
  64. 三美神 パステル, 紙/135.9×69.8cm/1895年頃(カーライル美術館蔵)

65. 若い女 チョーク、紙/40×33cm/1896年(東京、ギャラリー・アート・アンド・クラフト蔵)
66. 《キューメーのシビュレ》によるエッチング 43.5×17.5cm/1882年
67. 「いばら姫連作」より《いばらの森》(1890年)によるフォトグラヴェール 41.9×82.8cm/1892年(東京、ガレリア・グラフィカ蔵)
68. 「いばら姫連作」より《いばらの城の中庭》(1890年)によるフォトグラヴェール 42.4×78.4cm/1892年(東京、ガレリア・グラフィカ蔵)
69. 《粉ひき場》(1870年)によるエッチング 23.7×51.5cm/1899年
70. 《春》によるエッチング 43.8×30cm/1900年
71. 「ザ・フラワー・ブック」より《ヴィナスの鏡》(1885年頃)による石版画 直径16.5cm/1905年
- サー・ローレンス・アルマ=タデマ(1836—1912)
72. ピュリケーの踊り 油彩、板/41.5×82.5cm/1869年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
73. 嘆願 油彩、画布・板/22.5×36.5cm/1876年(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
74. 賛美 油彩、板/40.5×33cm(楕円)/1907年(三越蔵)
- アルバート・ムーア(1841—1893)
75. ざくろ 油彩、画布/28×37cm/1866年頃(ギルドホール・アート・ギャラリー蔵)
76. ギリシアの劇 黒チョーク・水彩、紙/12.7×53cm/1868年頃(ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵)
77. アネモネ 油彩、画布/44.4×15.2cm/1880年(フィッシャー・ファイン・アート蔵)
78. 赤い実 油彩、画布/48×117cm/1884年頃(プレ・ラフィライト・トラスト蔵)
- ウォルター・クレイン(1845—1915)
79. ローエン格林 色チョーク・ボディカラー、紙/90×56cm/1895年(フォーブス・マガジン・コレクション蔵)
- ジョン・メリッシュ・ストラドウィック(1849—1935)
80. 無言歌 油彩、画布/72×97cm/1874年頃(クリストファー・レノックス=ポイド氏蔵)
- ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス(1849—1917)
81. 人魚 油彩、画布/98×67cm/1900年(英国王立美術院蔵)
- チャールズ・ヘイゼルウッド・シャノン(1863—1937)
82. 真珠採り 油彩、画布/95×69.5cm/1894—99年(ロンドン、ファイン・アート・ソサエティー蔵)

#### 参考出品(1)

藤島武二(1867—1943)

1. 天平の面影 油彩、画布/198.5×94cm/1902年(石橋美術館蔵)
2. 画稿集 油彩・水彩・墨等、和紙/28.2×20.1×6.7cm(ブリヂストン美術館蔵)
3. 縮図帖 木版、紙/36.7×33.7×1.5cm(ブリヂストン美術館蔵)

#### 参考出品(2)

1. 雑誌『明星』複製版
2. イギリス美術書3冊(国立国会図書館蔵)



78



57



展覧会ポスター



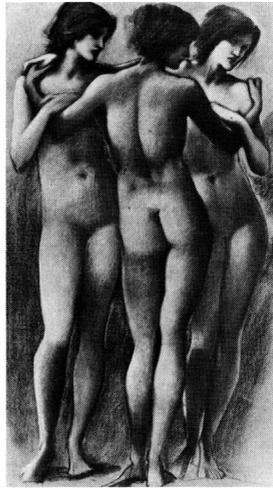
4



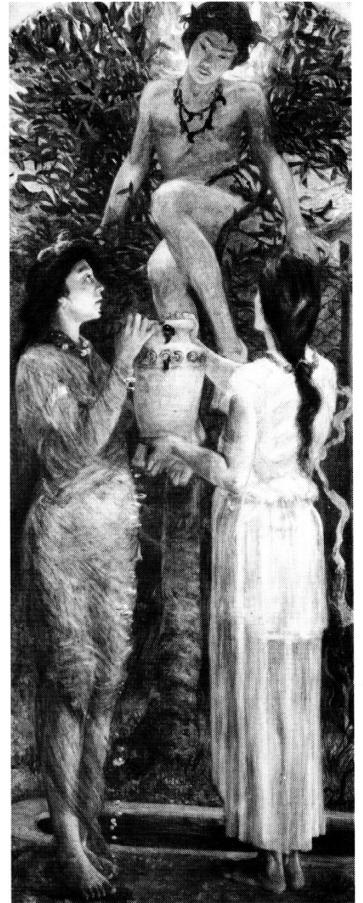
3



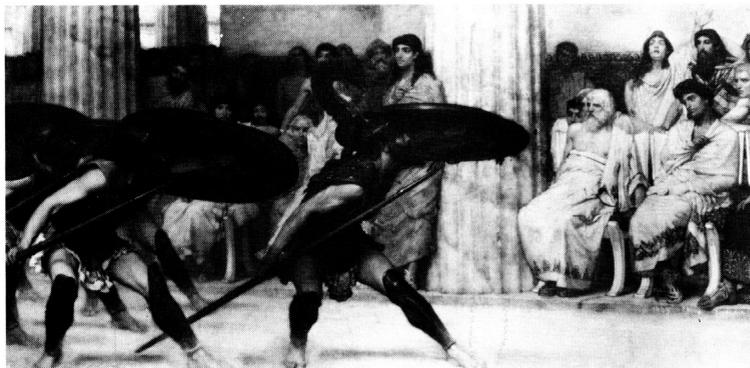
56



64



23



72

## 京都国立近代美術館洋画名作展

1982年4月22日—7月4日(月曜休館/65日間, 石橋美術館常設展に併設)

主催: 石橋財団石橋美術館

出品内容: 油彩31点, 墨1点 計32点

入場者総数: 13,854人

### 藤島武二

1. 花籠 油彩, 画布/63×41cm/1913年

### 熊谷守一

2. 化粧 油彩, 画布/43×35cm/1956年

### 津田青楓

3. 研究室に於ける河上肇像 油彩, 画布/72.5×61cm/1926年

### 金山平三

4. 溪流 油彩, 画布/49×64cm/制作年未詳

### 藤田嗣治

5. メキシコに於けるマドレーヌ 油彩, 画布/90.8×72.8cm/1934年

### 安井曾太郎

6. 婦人像 油彩, 画布/115.2×87.5cm/1930年

### 小林和作

7. 春の山 油彩, 画布/80.5×100.2cm/1967年

### 鍋井克之

8. 月光と海水 油彩, 画布/90.7×116.3cm/1956年

### 田中善之助

9. 女 油彩, 画布/71.5×53cm/1911年

### 国吉康雄

10. 鶏に餌をやる少年 油彩, 画布/73.7×59.7cm/1923年

### 大久保作次郎

11. 街角の魚店 油彩, 画布/97×130.3cm/1927年

### 須田国太郎

12. 鶺鴒 油彩, 画布/72×90cm/1952年

### 岸田劉生

13. 麗子弾絃図 油彩, 画布/40.9×31.7cm/1923年

### 長谷川利行

14. 女 油彩, 画布/97×130cm/1932年

### 長谷川 潔

15. パラ(白い花瓶に挿した薔薇その他)  
油彩, 画布/92×73.4cm/制作年未詳

### 中川紀元

16. 街 油彩, 画布/144×56.8cm/1919—21年

### 有馬さとえ

17. 新緑の頃 油彩, 画布/60.5×72.5cm/1922年

### 曾宮一念

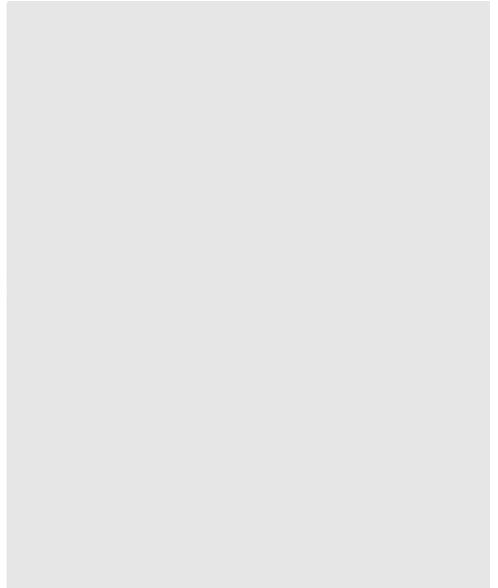
18. スペインの野 油彩, 画布/64×90cm/1969年

### 石垣栄太郎

19. 鞭うつ 油彩, 画布/145.5×106.5cm/1925年

### 里見勝蔵

20. 女 油彩, 画布/92×65.2cm/1929年



3



6

前田寛治

21. ポーランド人の姉妹 油彩, 画布/115×90cm/1923年

牛島憲之

22. 炎昼 油彩, 画布/121×60.5cm/1946年

牛島憲之

23. 街 油彩, 画布/59.5×120.5cm/1956年

野口謙蔵

24. 水村雪後 油彩, 画布/130×193cm/1938年

荒井龍男

25. 森の部分 油彩, 画布/79.5×99cm/1935年頃

吉原治良

26. 涙を流す顔 油彩, 画布/116.7×91cm/1949年

難波田龍起

27. 原始象形 油彩, 画布/130.9×160.3cm/1958年

長谷川三郎

28. 自然 墨, 紙/135×66.5cm/1953年

山口 薫

29. 季節の哀歎「田圃と鳥」 油彩, 画布/130×162.0cm/1953年

森 芳雄

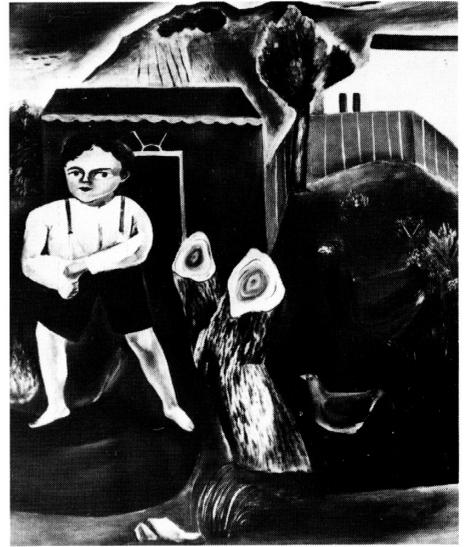
30. 石膏のある静物 油彩, 画布/89.5×71cm/1953年

香月泰男

31. 奇術 油彩, 画布/73×117cm/1958年

斎藤真一

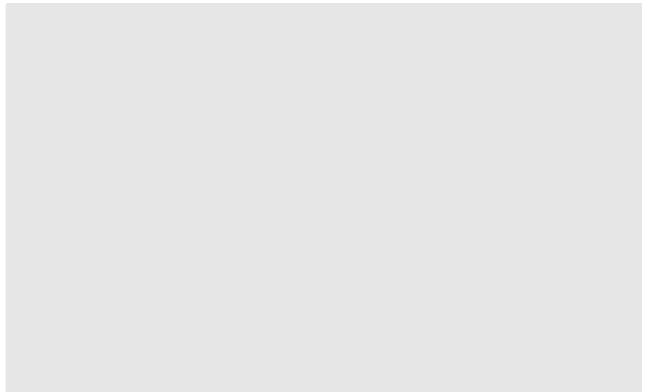
32. 上河原の陽 油彩, 板/中央130×130cm, 左右各130×58cm/1973年



10



12



31

## 《美術館講座》

1982年3月19日

「青木繁とイギリス絵画」

講師：ブリヂストン美術館学芸課長 阿部信雄

## 1982年度入場者数

### ブリヂストン美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	21	12,356	4,628	775	981	18,740	11,076	29,816	1,420
5	22	8,797	3,360	366	2,148	14,671	6,642	21,313	969
6	26	3,730	900	105	479	5,214	45	5,259	202
7	27	4,410	1,630	582	770	7,392	42	7,434	275
8	26	6,025	2,020	1,555	307	9,907	59	9,966	383
9	17	27,421	7,482	1,874	820	37,597	8,640	46,237	2,720
10	27	56,827	19,522	4,155	2,952	83,456	24,711	108,167	4,006
11	20	9,951	4,831	1,038	478	16,298	1,461	17,759	888
12	22	2,709	482	74	392	3,657	56	3,713	169
1	23	3,270	648	143	147	4,208	32	4,240	184
2	24	4,181	904	159	779	6,023	35	6,058	252
3	27	4,477	1,085	289	390	6,241	46	6,287	233
合計	282	144,154	47,492	11,115	10,643	213,404	52,845	266,249	944

### 石橋美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	26	6,377	938	1,346	3,165	11,826	3,040	14,866	572
5	27	3,809	334	456	2,143	6,742	210	6,952	257
6	26	2,208	152	136	1,814	4,310	165	4,475	172
7	23	6,601	552	834	2,382	13,407	3,038	13,407	583
8	23	10,627	1,362	2,629	3,971	18,589	10,687	29,276	1,273
9	26	1,995	106	112	1,990	4,203	90	4,293	165
10	28	2,170	129	197	5,210	7,706	232	7,938	284
11	25	2,153	91	126	2,953	5,323	153	5,476	219
12	23	906	124	43	339	1,412	36	14,48	63
1	23	1,084	78	160	144	1,466	71	1,537	67
2	24	1,493	95	61	464	2,113	61	2,174	91
3	24	5,931	988	820	2,406	10,145	3,374	13,519	563
合計	298	45,354	4,949	6,920	26,981	84,204	21,157	105,361	354

ドガ, エドガー

DEGAS, Edgar

1834—1917

レオポール・ルヴェールの肖像

1874年頃

油彩・画布, 65×54cm

Portrait of Léopold Levert

ca. 1874

Oil on canvas, 65×54cm

来歴 Prov.: Henri Rouart, Paris; Chéramy Collection, Paris; Ernest Rouart, Paris; Nate B. and Frances Spingold collection, New York; Wildenstein, New York; acquired by the Museum, 1982

展覧会歴 Exh.: *Degas, portraitiste, sculpteur*, Musée de l'Orangerie, Paris, 1931, no. 58; *Portraits français*, Galerie Charpentier, Paris, 1945, no. 28; *French Painting, 1100-1900*, Carnegie Institute, Pittsburgh, 1951, no. 117; *The Nate and Frances Spingold Collection*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1960, no number; *Modern French Painting*, Wildenstein, New York and Brandeis University, Waltham (Massachusetts), 1962, no. 13; *Summer Loan Exhibition*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1967, no. 33; *Paintings from the Nate B. and Frances Spingold Collection*, Wildenstein, New York, 1969, no. 11; *Faces from the World of Impressionism and Post-Impressionism*, Wildenstein New York, 1972, no. 26.



文献 Bibl.: Paul Lafond, *Degas*, Paris, 1918-19, vol. I, p. 82 (repr.); *idem*, vol. II, p. 17; M. Dormoy, "The Ernest Rouart Collection," *Formes*, no. 24 (April, 1932), repr. pl. between pp. 258-59; John Rewald, *Degas*, Paris, 1937, pl. 23; M. Rebatet, *Degas*, Paris, 1944, no. 30 (repr.); Paul-André Lemoisne, *Degas et son œuvre*, Paris, 1946, vol. I, p. 82; *idem*, vol. II, no. 358 (repr.); Michel Florisoone, *Portraits français*, Paris., 1946, p. 130 (repr.); Jean Sutherland Boggs, *Portraits by Degas*, Berkeley and Los Angeles, 1962, p. 121; Franco Russoli and Fiorella Minervino, *L'Opera completa di Degas* (Classici dell'Arte), Milan, 1970, no. 380(黒江光彦日本語版編集『リッツオーリ版世界美術全集(14)ドガ』集英社, 1975, no. 380); Antoine Terrasse, *Edgar Degas*, Milan, 1972, p. 28, fig. 1(大島清次訳『フェブリー版世界の美術(2)ドガ』小学館, 1975); *Centenaire de l'Impressionnisme* (exhibition catalogue), Paris, 1974, p. 241(repr.) (not in exhibition); *The Crisis of Impressionism* (exhibition catalogue), 1878-1882, Ann Arbor, 1979, p. 126 (not in exhibition); Sophie Monneret, *L'Impressionnisme et son époque*, vol. I, Paris, 1978, p. 334; "Principales acquisitions des musées en 1982", *La Chronique des Arts*, supplement to the *Gazette des Beaux-Arts*, March 1983, no. 333.

ムア, ヘンリー

MOORE, Henry

1898—

横たわる人体のための習作

1949年

チョーク・水彩・紙, 39×57cm

右下に署名・年記: Moore 49

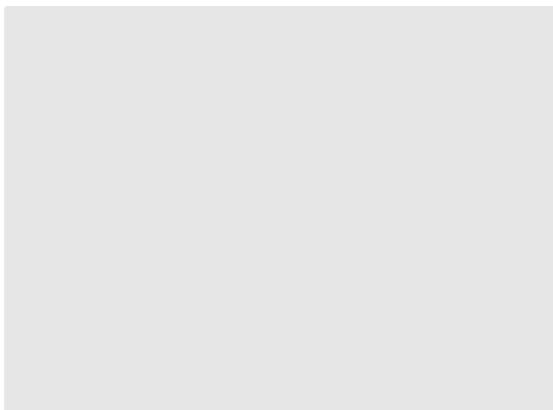
Studies for Reclining Figures

1949

Chalk and watercolor on paper, 39×57cm

Signed and dated lower right: Moore 49

来歴 Prov.: Galerie Forme, Tokyo; acquired by the Museum, 1982



## 川上涼花

KAWAKAMI, Ryoka

1887—1921

### 麦秋

1919年

油彩・画布, 53.0×45.5cm

裏面に鉛筆による署名・年記: 大正8年6月涼花

### Harvest of Wheat

1919

Oil on canvas, 53.0×45.5cm

Signed and dated in pencil on reverse

来歴 Prov.: 酒井億尋氏寄贈(Donation of Mr. Sakai)

展覧会歴 Exh.: 「川上涼花遺作展」東京資生堂, 1936; 「大正期の洋画」神奈川県立近代美術館, 1962, no. 23(《初夏》); 「大正期の洋画の展開・中村彝の時代展」茨城県立美術博物館

文献 Bibl.: 『川上涼花画集(川上涼花遺作展記念出版)』東京(酒井億尋), 1936, no. 6(《麦秋A》)



### 麦秋

1919年

水彩・和紙, 29.5×46cm

### Harvest of Wheat

1919

Watercolor on Japanese paper 29.5×46cm

来歴 Prov.: 酒井億尋氏寄贈(Donation of Mr. Sakai)

展覧会歴 Exh.: 「川上涼花遺作展」東京資生堂, 1936

文献 Bibl.: 『川上涼花画集(川上涼花遺作展記念出版)』東京(酒井億尋), 1936, no. 9(《麦秋B》)



### 桐と麦

1917

木炭・紙, 31.5×47.5cm

### Paulownias and Wheats

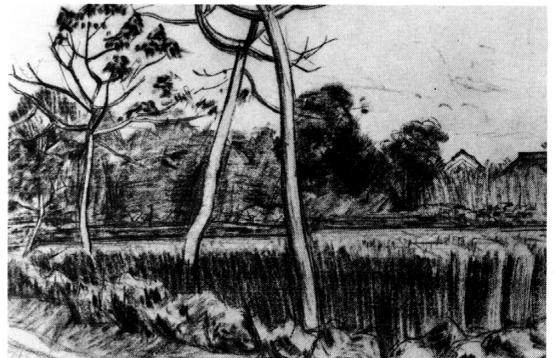
1917

Charcoal on paper, 31.5×47.5cm

来歴 Prov.: 酒井億尋氏寄贈(Donation of Mr. Sakai)

展覧会歴 Exh.: 「川上涼花遺作展」東京資生堂, 1936

文献 Bibl.: 『川上涼花画集(川上涼花遺作展記念出版)』東京(酒井億尋), 1936, no. 26



---

古沢岩美

**FURUSAWA, Iwami**

1912—

斃卒

1956年

油彩・画布, 200.0×424.5cm

左下に署名・年記: 美 *Iwami. F. LVI*

**Dying Soldier**

1956

Oil on canvas, 200.0×424.5cm

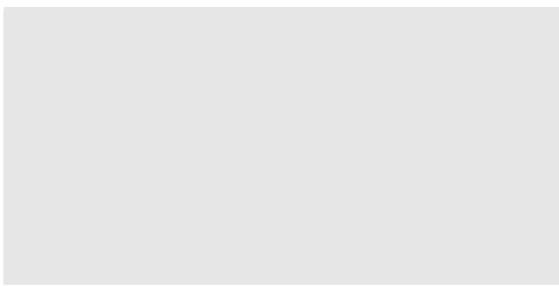
Signed and dated lower left: 美 *Iwami. F. LVI*

来歴 Prov.: 作者寄贈(Donation of the artist)

展覧会歴 Exh.: 「第2回現代日本美術展」, 1956; 「古沢岩美展」

板橋区立美術館, 1982, no. 41

文献 Bibl.: 『古沢岩美画集』美術出版社, 1974



---

秋吉賢史

**AKIYOSHI, Kenji**

1937—

日常(街で……)

1982年

油彩・画布, 130×162.0cm

左下に署名・年記: *AKIYOSHI 82*

**Daily Affairs (in the Town)**

1982

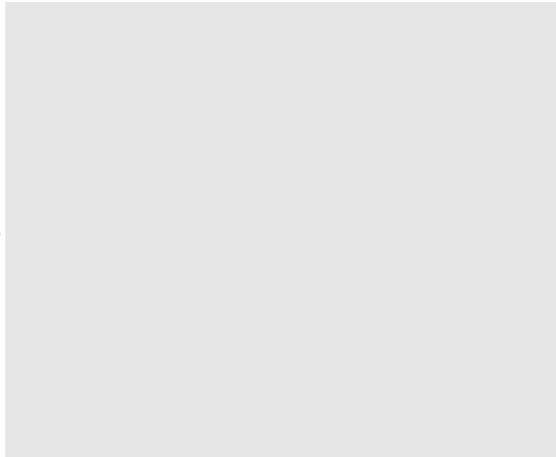
Oil on canvas, 130.0×162.0cm

Signed and dated lower left: *AKIYOSHI 82*

来歴 Prov.: 作者寄贈(Donation of the artist)

展覧会歴 Exh.: 「第15回西日本美術展」1982, 石橋美術館賞

賞



---

柴田昌一

SHIBATA, Shoichi

1921—

**Unit Ground (L)-I**

1982年

エッチング・アクアティント・転写, 42×108cm

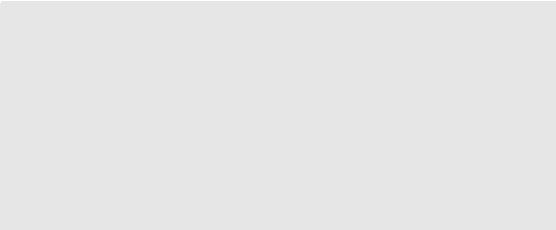
右下に署名・年記: '82 Shoichi Shibata; 左下に番号: 1/10; 中央下に題名: *Unit ground (L)-I*

**Unit Ground (L)-I**

1982

Etching, aquatint and transfer, 42×108cm

Signed and dated lower right; '82 Shoichi Shibata; numbered lower left: 1/10; entitled lower center: *Unit ground (L)-I*  
展覧会歴 Exh.: 「第14回日本国際美術展」, 東京都美術館, 京都市美術館, 1982. ブリヂストン美術館賞受賞 (*The 14th International Art Exhibition, Japan*, Tokyo Metropolitan Art Museum and Kyoto Municipal Art Museum, 1982, awarded the Bridgestone Museum of Art Prize)



**Unit Ground-II**

1982年

エッチング・アクアティント・転写, 42×71cm

右下に署名・年記: '82 Shoichi Shibata; 左下に番号: 1/20; 中央下に題名: *Unit ground-II*

**Unit Ground-II**

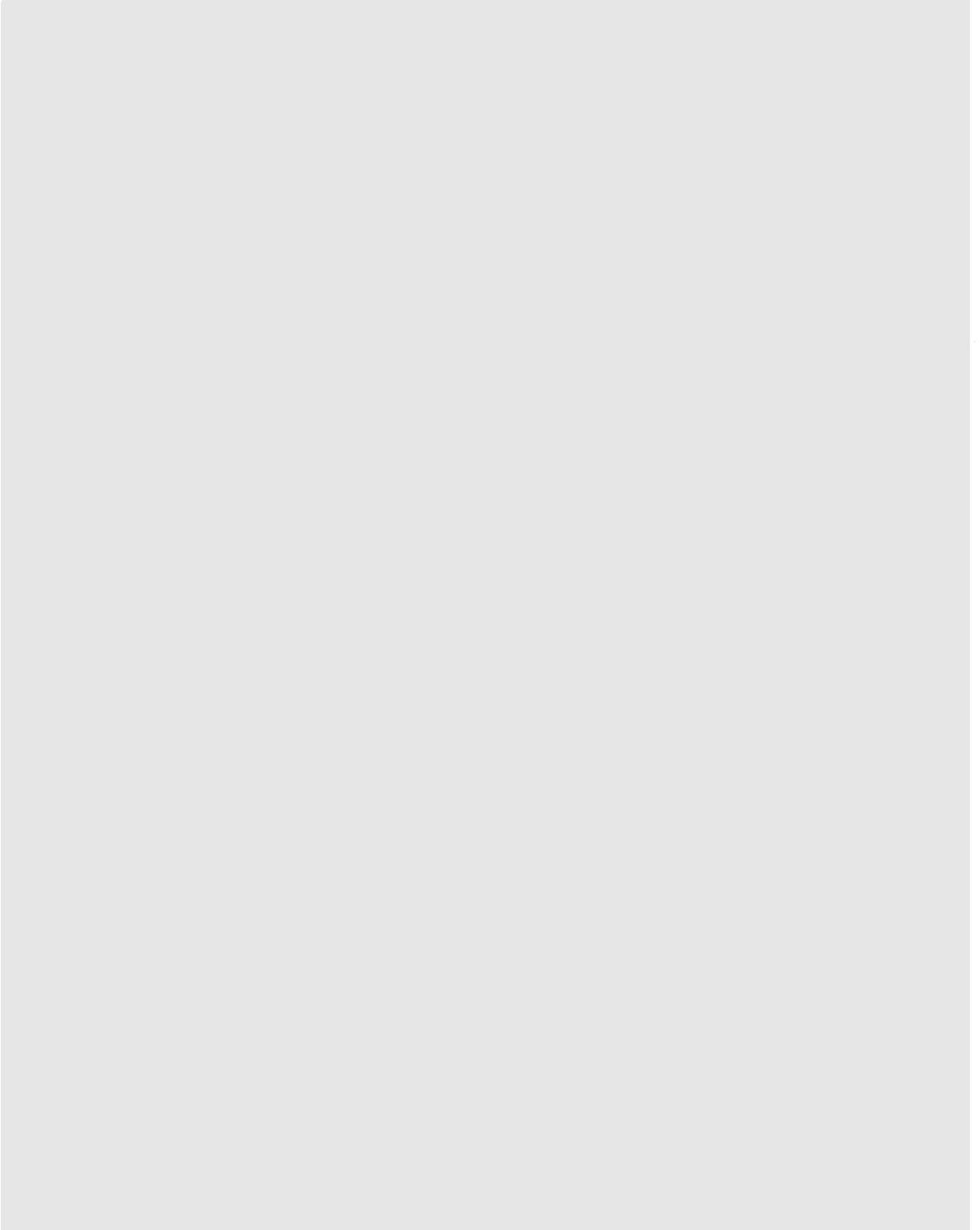
1982

Etching, aquatint and transfer, 42×71cm

Signed and dated lower right: '82 Shoichi Shibata; numbered lower left: 1/20; entitled lower center: *Unit ground-II*

---

## 修復記録



藤島武二《天平の面影》《諧音》そして《蝶》に  
表象された雅楽と西洋音楽 (その1)

中田裕子

### はじめに

1905年(明治38年)、創立10周年を迎えた白馬会はそれを記念する展覧会として、新作画と共に回顧の展示が行われた。その『紀念画集』には、「茲に回顧展覧会なるもの一新例が我邦に於て始めて開かれた」とある。黒田清輝は、新作画5点と、かつてソシエテ・デ・ザルティスト・フランセのサロンに入選し、明治美術会第5回展にも出品した《読書》他45点を、当時すでに創作活動をやめていた久米桂一郎は、第4回内国勸業博覧会に出品した《八坂の塔》他17点を、和田英作や岡田三郎助等も新作画とともに白馬会第1回展に出品した作品他数点を展示した。理由は分らないが、藤島武二は新作画を発表せず、1902年(明治35年)白馬会第7回展で好評を得た《天平の面影》1点のみであった<sup>1)</sup>。この回顧展に《天平の面影》1点のみと言うことは、藤島にとって、当時、この作品が最も意味のあるものであったと言うことであろう。藤島は、後年、来し方を振り返って、「私の学生時代」<sup>2)</sup>「足跡を辿りて」<sup>3)</sup>「思い出」<sup>4)</sup>等の文章を残しているが、この時代については、『『明星』の表紙絵は一条成美が死んでから頼みにきましたので画きました』<sup>4)</sup>と言う一行のみである。シカゴの博覧会に出品するつもりで制作した《桜狩》については、「私は百号位の《花見の図》を出品するつもりで、徳川末期の風俗画を画きました。」<sup>2)</sup>そしてこれは明治美術会第5回展に出され、森鷗外の『めざまし草』誌上で批評として大変賞めてあったとある<sup>4)</sup>。

ヨーロッパ世紀末美術と出会い、そして文部省留学生として旅立つまでの6年間について、その時期に描いた作品について、なぜ藤島は触れていないのであろうか。雑誌『明星』がヨーロッパ世紀末美術と出会ったちょうど同じ頃、藤島も、アール・ヌーヴォー、ユージェントシュティールの作品、或いは資料を手にはしている。日本で初公開されたと思われる、アルフォンス・ミュシャのポスターが展示された1900年(明治33年)白馬会第5回展のポスターは藤島の制作であったが<sup>5)</sup>、このポスターには、明らかにミュシャの『『ジスモンダ』のポスター』の影響が見られる。そしてこれは同年ニースで開催されたエキスポジション・デ・ザッフィッシュに出品して銀賞を得ている<sup>6)</sup>。

また、雑誌『明星』との交渉により社会的活動範囲も拡大し、作品の上から見てもっとも充実した時期であったはずなのに。藤島は黙して語っていない。

当時、日本に於ても紛れもなく世紀末と言う時が経過していた。この小論では、『天平の面影』《諧音》そして《蝶》という作品を通して、その日本の世紀末のもつ、ほんの一面なりとも明らかに出来たら幸いである。

ブリヂストン美術館は、藤島武二の《画稿集》を所蔵している。そこには、『天平の面影』《諧音》のためと思われる水彩、デッサンがあり、『蝶』に関連があると思われるものも入っている。この《画稿集》は和紙二ツ折りで約600頁に及び、1891年(明治24年)頃<sup>7)</sup>から「1929年(昭和4年)」の年記のあるものまでを含んでいる。

児島喜久雄は、1939年に藤島について下記のように述べている。「すっかり脂ぎって肥満って了って堂々とはして居るけれども、昔のような純な感じは丸で無く、寧ろ愴態に見えた」、そして晩年の作品について、余り枯れ過ぎて居て私にはちっとも面白くないと<sup>8)</sup>。しかし、『画稿集』を見ると、その昔より、ずうっと細い糸のように持ち続けていたと思われるものが、臆気ながら浮び上ってくる。それは、西方への憧憬、といったようなロマンティシズムであろうか。

### I

1900年夏頃、ヨーロッパ世紀末美術の資料を初めて見たであろうと思われる藤島は、1901年(明治34年)1月より『明星』の挿絵を描き、2月からはその表紙絵を担当するようになる。同8年月刊行された、鳳晶子の『みだれ髪』の装幀も藤島の手になるものであった。これらはアール・ヌーヴォーの影響を色濃く示している。この年の白馬会第6回展で発表された《造花》は、明るい日ざしが差し込む窓辺の仕事場で三色堇を作っている少女を描いている。この作品は風俗画の範疇に入るであろうが、俯む少女の横顔、そして、窓際の机の上にあるのは造花であろうか、百合の花等の草花は、やはり、アール・ヌーヴォーの影響<sup>9)</sup>と見ることが出来ると思う。

石井柏亭が、「洋風画家が天平の服装を利用した最初の試みとして記憶さるべきである」<sup>10)</sup>と述べている《天平の面影》は、1902年11月発行の白馬会第7回展の画集には掲載されておらず、石版画4点と《雨後》《泊舟》《松》の油彩画3点が載っている。石版画(新作の版画が展覧会に出されたのは、これが最初で最後であろう)は、『明星』との係わりに囚るものであろう。そして、三点の油彩画は、モノクロームの図版で詳細は分らないが、光が大きく跳動している明媚な風景画であろう。しかし、高い賞賛に浴した《天平の面影》は、なぜ画集に掲載されていない

いのであろうか。

藤島がヨーロッパ世紀末美術の資料を手にした後に、しかも世紀末的色彩の濃い《天平の面影》が描かれる以前に制作された、《造花》及び《松》等の油彩画は、《造花》のようにヨーロッパ世紀末美術の影響を多少とも指摘出来るとしても、明るい外光に包まれた風景画であり、風俗画であった。では、《天平の面影》が描かれた1902年という時期に、何かそれを生み出すよう促す出来事なり、要因なりが藤島の周辺にあったのであろうか。

この《天平の面影》は縦長の画面で、桐の木の下に佇み、箏篋を両手で持って胸にあて、天平時代の髪型と服装をした女性が描かれている。背景は金泥で閉され、大理石であろうか、浮彫装飾を施された低い壁が、金地の空間と女性の立っている空間を分けている。そして「画面の縦枠と平行する垂直の桐の木、頭部を斜めに横切る枝、腰壁の水平線」<sup>11)</sup>、桐の枝と平行する箏篋の弦の線、閉ざされた金地の背景といったように、画面は単純に、直線的に、平面的に、そしてドラマティックに構成されている。そこには静謐な空気と古代、天平の良き時代に対する憧憬とともに畏敬の念が感じられる。そしてこの作品には箏篋という古代の楽器をモチーフにして、音楽というものが視覚的に表現されているといえよう。また箏篋が描かれた作品に《天平時代》(29.3×29.5cm)<sup>12)</sup>というのがある。船の上、箏篋の横には坐る女性が、箏篋の後ろには子供がいる。背景は海、または青水沼<sup>13)</sup>であろう。かなたに島がみえる。

そして1903年(明治36年)白馬会第8回展で発表されたのは《諧音》である。藤島はこの作品を「未完成のまま出品した。これは、その後加筆改作したが、意に満たず、放棄した様である」<sup>14)</sup>らしいが、その展覧会評<sup>15)</sup>で、上田敏は次のように述べている。「前年天平時代の人物を描いたよりも、今年は更に進歩されしものか、全図よく調和し、人物の姿勢自然にして、心を音楽の妙境に放遊させて居る心持が、充分見られる」と。「又同氏の作品に於て多とべすきは、粗大なる思想、例へば平凡なる歌に現われた詩趣又は浅薄なる宗教思想、或は露骨なる忠孝愛国等の観念を描くことなく、(中略)画を以てせずんば現はし難き思想を人格化して、趣味ある作が成されたことである」と。蒲原有明もまた、その「展覧会評」<sup>15)</sup>で「藤島武二氏は去秋《天平の面影》を出して声名世に布く。その姉妹作とも見るべき《諧音》の一図、またわれ等が讚嘆措かざるところなり。裸身の女、膝上に阮咸を載せ、右手を転転に措きて絃を整へ、左手にこれを弾き試みんとす。この画の最も好きあたりは楽器をまさぐる纖手にあり。清秀の面また言う可からず。豹皮器什花卉の装飾に至るまで一筆苟もせざる氏が特長たり」と述べている。現在

目にするこの出来ないこの作品も、古代の楽器、阮咸が描かれ、音楽というものがやはり視覚的に表現されているのであろう。

箏篋には鳳主箏篋、臥箏篋、堅箏篋の三種があり、《天平の面影》や《天平時代》に描かれているのは堅箏篋である。西域より伝来し、原型は古代アッシリア浮彫に見られる堅型ハープで、一説には西の方へ伝播してベタルが付きハープとなり、シルクロードを経て東に伝わり箏篋となった。我国へは初め百済楽用の小型のものが伝来し、「百済琴」と呼ばれ、柱を帯に挟み固持し、両手で演奏したらしい。その演奏図は《東大寺戒壇院扉絵》の中にある。そして、やや遅れて伝来した唐楽用の大型のものが、単に「くご」と呼ばれたらしい。その演奏図は正倉院《彈弓墨絵》の中にある。しかしいずれも、平安時代中期の楽制の改革で、音が小さいといった理由で整理されたらしいので、現存する箏篋は正倉院南倉にある二張分の残欠にすぎず、完全なものは一張もない。しかもこの正倉院伝来のものは大型の唐楽用のものである。すなわち《螺鈿槽箏篋残欠銘「東大寺」》と《漆槽箏篋残欠》(現存長は、148.5cm, 137.8cm)である。小型の「百済琴」は仏画經典に描かれているだけで、すでに亡失している。一方、阮咸は晋の竹林七賢の1人で琵琶の名手であった阮咸が愛用した四絃琵琶である。阮咸、または阮咸琵琶と呼ばれ、唐代に一時大流行した。やはりこれも西方起源らしい。また、この阮咸も平安中期に整理され、正倉院南倉に《桑木阮咸》、北倉に《螺鈿紫檀阮咸》が完全な型で現存しているだけである。

藤島が《天平の面影》を描いた頃の正倉院は一般公開されていない。しかし、1889年(明治22年)より、曝涼期間に一定資格者の参観が許されている。それは皇室関係者、高級役人、外国高官そして一部の学者である。藤島は拝観出来たのだろうか。『美術画報』(12-4, 1902年11月20日)に掲載された図版解説には「未成なるが故に軽々しく評し去ること能わず、氏曾て寧楽の古都に遊び、天平時代の遺品を見、之に依て着想を得、更に穿鑿を経、当代の面影を髣髴たらしめんとて、此図を作りたるものなりと云う」とある。ここには藤島が正倉院を拝観したとは記されていないし、阮咸は完全な型で現存しているが、箏篋は大破している。藤島が「天平時代の遺品」と言ったのは現在、奈良正倉院事務所所蔵の2張の箏篋(fig. 1, 2)のことである。また東京国立博物館に2張の箏篋(fig. 3, 4)が所蔵されている。これら2張の箏篋も藤島は確実に見たと思われる。これら4張の箏篋は、大破している正倉院の箏篋の復原模型(《螺鈿槽箏篋銘「東大寺」》と《漆槽箏篋》)であるが、楽器として復原されたわけではない。(楽器として復原されたのは、1974年(昭和49年)日本雅

楽会によるものであり、東京国立博物館所蔵の箏篋を参考にしたそうである。また、東京国立博物館は、阮咸の複製品二面(fig. 5, 6)も所蔵している。

1892年(明治25年)宮内省に正倉院御物整理掛が設けられ、宝物の修理、複製、復原、整理研究が日露戦争の勃発する1904年(明治37年)まで続けられた。1893年11月より赤坂離宮において、宝物の修理、複製、復原模造の作業が開始され、当時一流の工匠を擁して豪華な複製品や、今日では想像の産物としてしか映らない模造品が作られた。すなわち、古楽器本来の機能構造や音律の面は従として取扱われたのである。響板の後ろ、槽の部分が刳貫かれておらず、音は出ないし、大変重たいものだそうである。しかし、漆工品としては、明治期の素晴らしい作品ではないかと思われる。これらの作業は我国の伝統工芸の進歩と保存に大きく貢献<sup>16)</sup>したという。その箏篋を、何時かは不明であるが、藤島は奈良で見た。またそれは、1900年パリ万国博覧会の為に編纂され、翌1901年農商務省より出版された、『稿本日本帝国美術略史』に fig. 1 と fig. 2 が図版掲載されている。

『美術新報』(1-9, 1902年7月5日)に、皇室博物館は三号館に於て、美術及び美術工芸品の模本の大規模な陳列を行ない、第4室には織物と牙角竹木等の工芸品が展示されたという記事がある。東京国立博物館には、その時の陳列の記録がまったくなく、『美術新報』に載っている作品以外、何が展示されたのか不明である。しかし、当時完成していたであろう正倉院御物整理掛による箏篋や阮咸等正倉院の工芸品の模造複製品は、この第4室に陳列されたと思われる。

ブリヂストン美術館は、前述したように、藤島武二の《画稿集》を所蔵している。その《画稿集》には、奈良にある、模造品の箏篋 (fig. 1) と皇室博物館所蔵の箏篋 (fig. 4) の墨による模写 (fig. 7, 8) があり、《螺細槽箏篋》(fig. 4) の装飾模様、鉛筆によるラフ・スケッチ (fig. 9, 10) もある。恐らく藤島は、皇室博物館の展示を見て、このラフ・スケッチをしたのであろう。また、fig. 7 は、『稿本日本帝国美術略史』に掲載された図版を敷き写したものである。その図版の解説に「柄を地に立てて弾すべく」とある。fig. 8 の方は、藤島が何を参考に模写したのか不明であるが、その右上に描かれているのは正倉院《彈弓墨絵》(fig. 11) の中にあるもので、前述したように、これは唐楽用の「くご」の奏法を示したものである。《天平時代》(fig. 12) に藤島は fig. 1 の奈良にある箏篋をモチーフに大型の唐楽用の「くご」を描いたことが分る。《画稿集》には、百済楽用の小型の箏篋、「百済琴」の彈奏図のある《東大寺戒壇院扉絵》の墨・水彩による模写 (fig. 13) がある。その右頁の図は、京都・上品蓮台寺本《現在過去

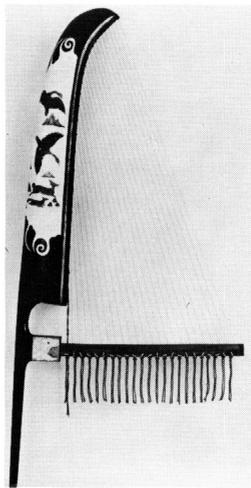


fig.1 《正倉院模型漆槽箏篋》  
正倉院事務所蔵

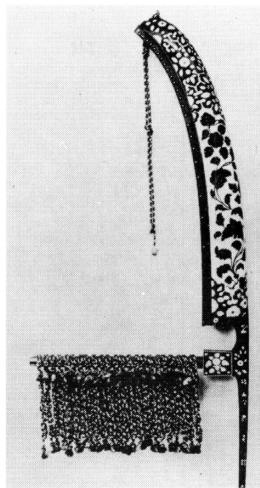


fig.2 《正倉院模型螺細槽箏篋 銘「東大寺」》  
正倉院事務所蔵

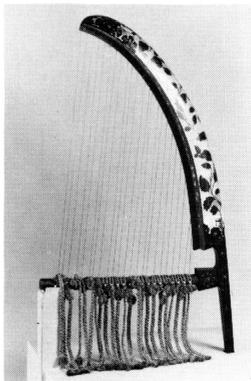


fig.3 《正倉院模型漆槽箏篋》  
東京国立博物館蔵

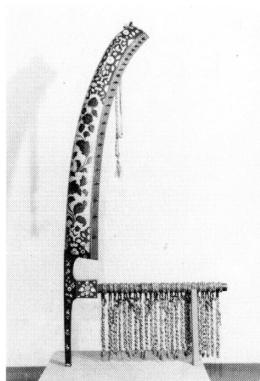


fig.4 《正倉院模型螺細槽箏篋 銘「東大寺」》  
1899年作 東京国立博物館蔵



fig.5 《正倉院模型螺細紫槽阮咸》東京国立博物館蔵

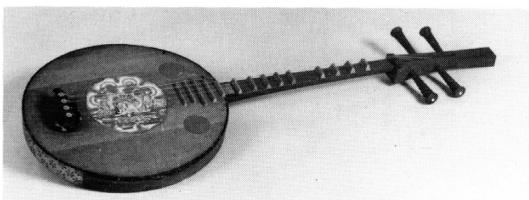


fig.6 《正倉院模型桑木阮咸》1899年作 東京国立博物館蔵

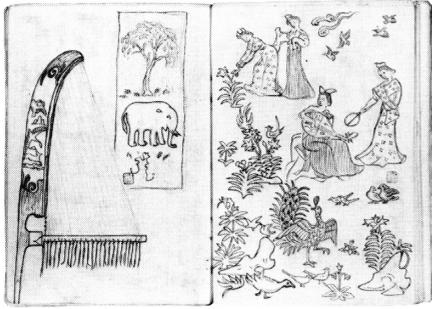


fig.7 《画稿集》

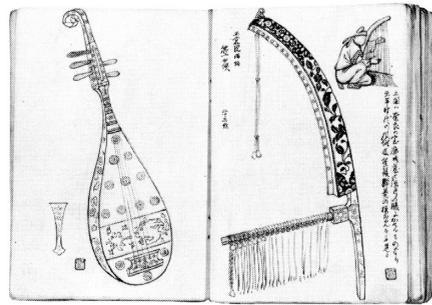


fig.8 《画稿集》

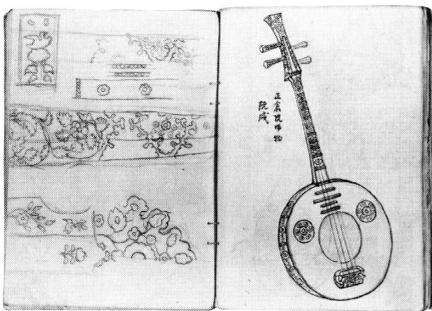


fig.9 《画稿集》

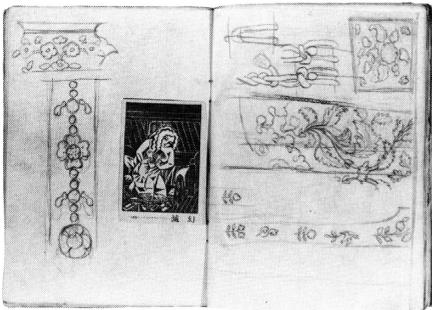


fig.10 《画稿集》

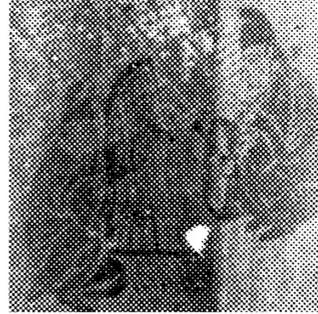


fig.11 《弹弓墨絵》  
の部分 正倉院蔵



ブリヂストン美術館開館記念展覧會 (天平時代) 蘇島武二

fig.12 《天平時代》



fig.13 《画稿集》

因果経(絵因果経)第3巻)の中に描かれている箜篌を抱えた伎女(fig. 14)(体を正面に、顔をやや左に向け、視線を左前方下に落している。《天平の面影》に描かれている女性も顔をやや左に向け、視線を左前方に落している。)であり(墨・水彩・鉛筆による模写)、藤島は、この《絵因果経》に出て来る箜篌を抱えた伎女から、《天平の面影》に描かれている女性のフォルムのヒントを得たのであろう。そして、この《天平の面影》に、小型の百済楽用の「百済琴」を描いたことが分る。

1912年7月の『美術新報』(10-9)に掲載された藤島の画室の写真(fig. 15)の中に箜篌がある。それは、藤島の背後にある本棚の上に立て掛けられている。藤島は《天平の面影》を制作するため、正倉院模造の箜篌をもとに、その小型の複製、すなわち、この百済琴を造らせたのであろう。そして、おちか<sup>18)</sup>というモデルに持たせて、《天平の面影》を制作したものと思われる。しかし、写真の箜篌の文様は、fig. 4の奈良の箜篌と同じもの、すなわち、《天平時代》に描かれているものと同じものようである。写真の中の百済琴は《天平の面影》に描かれている箜篌とは向きが違うので、もしかしたら、写真の中の百済琴の裏側には、《天平の面影》に描かれている箜篌と、同じ文様が施されてあったのかもしれない。その文様、つまり、《天平の面影》に描かれている箜篌の文様は、先に述べた《画稿集》の中に、その文様の鉛筆による細部のデッサンのある、fig. 2の帝室博物館所蔵の箜篌の文様をもとにしたものである。

このように、奈良で天平時代の遺品を見、正に、藤島が《天平の面影》《天平時代》で描こうとしたのは、今や完型を見ることの出来ない古楽器、すなわち、くごや百済琴であったのであろう。《天平時代》には、ほぼ、等身大のくごに坐像を配し、既に実物は失っている百済琴を描くために複製を造らせ、《絵因果経》に描かれている百済琴を抱えた伎女からフォルムを借り、《天平の面影》を描いている。藤島が《天平の面影》の文様のモチーフに使った、先端に紐が付いている fig. 4の箜篌は、「下層四角懸箜篌」(『古今目録抄』法隆寺五重塔の項)<sup>18)</sup>、すなわち「頭を吊る」<sup>19)</sup>という特殊な使用方法があるが、藤島は、自らの絵のモチーフとしてふさわしくないと考えたのであろう。タブローには描いていない。

また、藤島は、堅箜篌が描かれているものを知っていた。すなわち、箜篌に関する詳細な知識を持っていたということであろう。もちろん、箜篌の復原がなり、それが発表された時、それを説明するもの、それに関する何らかの参考図があったと思われるが、それにしても、藤島は豊かな古典の知識を持っていたように思える。

《画稿集》の中には、《天平の面影》の桐の花の下絵と思

われる図(fig. 16, 17)、腰壁(?)の装飾模様のヒントになったのではないかと思われる素描がある。桐の花は水彩で描かれている。腰壁の模様は鳳凰ではないかと推察するが、《画稿集》にあるのは、正倉院の《金銅鳳凰葛形裁文金銅幡(鳳凰模様の華鬘)》(fig. 18)であり、赤チョークで模写されている。(fig. 19)

さらに、《画稿集》の箜篌の注記に「正倉院御物」とある。金色に輝く背景を背に、鳳凰模様の低い壁に護られ、桐の木の下、正倉院の箜篌を抱えて佇む女性は、身分の高い人であろう。吉鳥の鳳凰は桐の木にのみ留まり、竹の実のみを啄むむという伝説がある。この伝説に由来する吉祥文様の桐竹鳳凰文は、天皇の紋章でもある。《天平の面影》に描かれている桐と鳳凰は、その女性の身分を象徴するもののように思える。石井柏亭は、『日本絵画三代誌』の中で《天平の面影》に触れながら、日本画の方には既に親山の光明皇后があると、意味ありげに述べているが、藤島には光明皇后を描こうという構想あったのであろうか。(当代の面影を髣髴たらしめんと言っているが)背景の空間は、光輝く畏きその人ゆえに、金色で塗り込められているのであろうか。

このような木の下に女性の立像を配置した構図のものとして、正倉院の《鳥毛立女屏風(樹下美人図)》がある。この《樹下美人図》の模写(fig. 20)もやはり、《画稿集》の中にある。これは墨、色鉛筆で描かれている。《天平の面影》の構図は、この《樹下美人図》の構図に似ているところがあると思われる。藤島は、この正倉院御物の《樹下美人図》より、《天平の面影》の構図のヒントを得たのであろうか。《絵因果経》も《樹下美人図》もともに平面的な構成である。加うるに《天平の面影》もまた、平面的な構成なのである。



fig.14 上品蓮台寺本(絵因果経第三巻)部分)



fig.15 藤島武二の画室

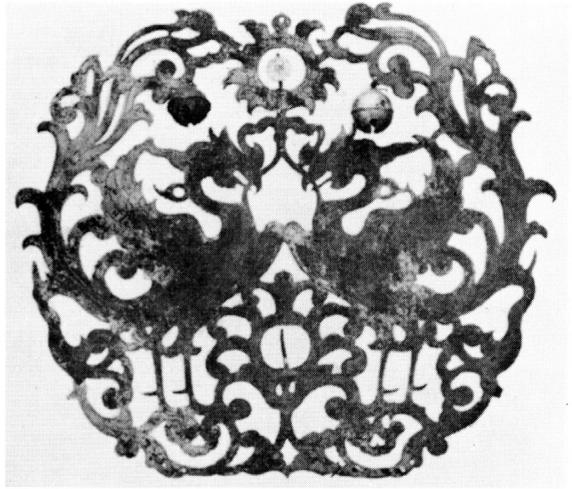


fig.18 《鳳凰模様の華鬘》正倉院蔵



fig.16 《画稿集》

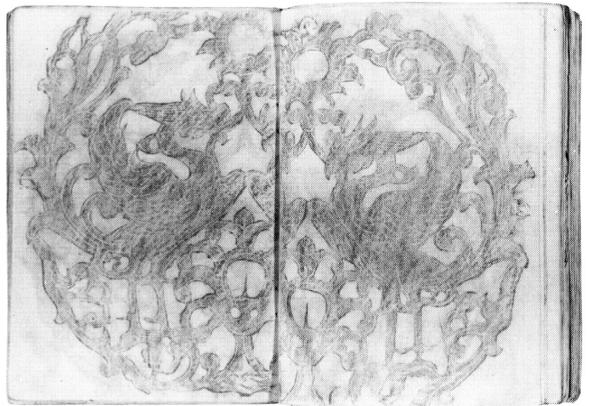


fig.19 《画稿集》正倉院には同形の華鬘が12枚ある。



fig.17 《画稿集》



fig.20 《画稿集》

ところで《天平の面影》は、前述の『美術画報』(fig. 22)のほか、『美術新報』(1-14, 1902年10月5日, fig. 21), 『明星』<sup>20)</sup>に、図版が載っている。『美術新報』と『明星』に掲載されている図版は同じもので、右下に署名(T. FVJ-ISI-HIMA)がある。久留米・石橋美術館の《天平の面影》(fig. 23)には署名がなく、fig. 21とfig. 23は明らかに違う作品である。『美術新報』、『美術画報』とも掲載されているのは写真版で、『美術新報』のタイトルには《天平時代の面影(パンノー・デコラチーフ半隻)》(傍点引用者)とある。つまり藤島には当初、一對、対幅にするという構想があったのであろうか。同誌(4-11, 1905年8月20日)に、白馬会創立10周年記念展に関する下記のような記事がある。「9月7日より上野公園5号館南部に於て開催する筈にて、今回は10周年記念展を兼ね、新作画の外、会員の旧作中逸逸の作品をも出陳する由、目下新作揮毫中のもは、和田英作氏の衣通媛、岡田三郎助氏の神話、藤島武二氏の天平時代美人(先年の作と一對になるもの)」と(傍点引用者)。つまり、この『美術新報』(4-11)に記されている、1905年に藤島が「揮毫中」の作品、すなわち《天平の面影》はfig. 21と対幅になるはずのものであることを示している。第7回展に出品された《天平の面影》と10周年記念展に出品されるであろうその作品とが異なるということであり、藤島は《天平の面影》の2点目を描いているというわけだ。その「揮毫中」の作品が、現在、石橋美術館にある《天平の面影》であろうと思われる。しかし『記念画集』には、その《天平の面影》の制作年は1905年ではなく1902年となっており、しかも、この10周年記念展に出品された《天平の面影》の図版が見つからず、断言はできない。また、1902年の『美術画報』の図版解説によると、白馬会第7回展(9月から10月に開催)の出品作として、「未成なるが故に」とあるが、『美術新報』は10月5日発行であり、『美術画報』は11月20日発行であるのに「未成」とはおかしい。この図版は署名がなく、梧桐の葉の部分は、久留米の《天平の面影》と同じように描かれている。しかし、桐の花が『美術新報』の図版と同じように大きい。婦人の顔付は三図とも少しずつ違っている。この『美術画報』の図版の作品を改作して、久留米の《天平の面影》を、10周年記念展に出品したとも考えられる。しかし、10周年記念展には第7回展と同じ作品が出品され、「揮毫中」の作品——久留米の《天平の面影》——が初めて出品されたのは、1927年(昭和2年)、「明治大正名作展」の時であった可能性もある。藤島は第7回展に出品した《天平の面影》(fig. 21)をいったいどうしたのであろうか<sup>21)</sup>。

翌年描かれ、蒲原有明が《天平の面影》の姉妹作であろうと言った《諧音》は対幅を意図したのか不明であるが、

2点(fig. 24, 25)あった。この2点の《諧音》は、横坐りの半裸の女性が阮咸の調弦をしている図である。《絵因果経》の中には、阮咸を持った女性は登場しないし、横坐りの人物も描かれていないが、半裸の女性は出て来る。それは天人である。《画稿集》の中に描かれている《絵因果経》の模写は、上品蓮台寺本以外、東京芸術大学本(fig. 26)、醍醐報恩院本等があり、そこに描かれている天人から、藤島は《諧音》の女性の着想を得たのではないであろうか。《東大寺戒壇院扉絵》も天人であり、やはり半裸に描かれている。背景はカーテンで、これも平面的に構成されており、彼女は舞台の上に登場しているようにさえ思える。そして膝の上に乘せている阮咸によって、舞台装置を変化させている。白馬会に出品した《諧音》の中の阮咸は《螺鈿紫檀阮咸》で、その阮咸の装飾模様に合わせて、蒲原有明のいう「豹皮器什花卉」が描かれている。一方、児島虎次郎旧蔵といわれ、一度も公の場に出たことのない《諧音》<sup>22)</sup>は、同様な構成ではあるが、その装飾模様のない《桐木阮咸》のゆえに「豹皮器什花卉」は描かれていない。《螺鈿紫檀阮咸》の方は《画稿集》に墨による模写(fig. 9)があり、鉛筆による細部のラフ・スケッチもある。(fig. 27) その槽表面の捍撓(撓うけ)の図が水彩で描かれている。(fig. 28) 《諧音》の2点に描かれている阮咸は、正倉院御物の複製品である帝室博物館所蔵の阮咸を参考にして、藤島は描いたと思われる。

以上のように見てくると、宮内省正倉院御物整理掛による正倉院の整理事業の藤島に与えた影響は少なからぬものであったように思える。1934年に初めて刊行された『藤島武二画集』に石井柏亭は下記のように述べている。「35年の《天平の面影》に至って其装飾的傾向がはっきり示される様になった。これは多分正倉院御物の筈篋其他が帝室博物館の為に模造された頃に起った、上古の憧憬と関連する所があったかも知れぬ」と。藤島個人のみがその影響を受けたわけではないのであろう。たとえば、1903年1月市村座で初演された森鷗外原作『玉匣両浦島』の、初めに登場する女の童に正倉院の楽器をかたどったものを持たせた<sup>23)</sup>という。しかし、御物整理掛による正倉院の整理事業に関する資料は、現在の正倉院事務所に、何一つ伝わっていないようである。また、このことが正倉院の七不思議の一つだそうである。現在の正倉院にとって、あの当時の御物整理掛による事業の資料は参考資料程度のものでしかないであろう。とはいえ、日本近代美術に投射された、その影の部分が如何に小さくとも、その資料が何一つ伝来してないということにより、それが過ぎ去った時の襲の間に埋没されてしまっているということは日本近代美術史にとって、とても大きな問題のように思える。



fig.23 《天平の面影》久留米石橋美術館蔵



fig.22 『美術画報』(1902年11月20日)

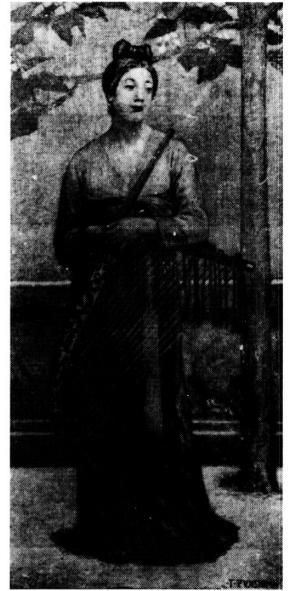


fig.21 『美術新報』(1902年10月5日)

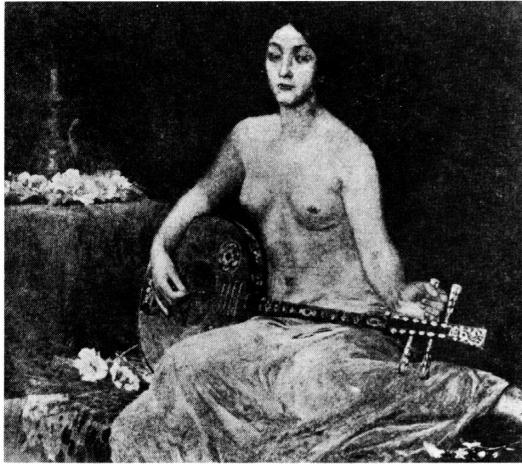


fig.24 《諧音》白馬会第7回展出品作『明星』(1903年11月)に掲載

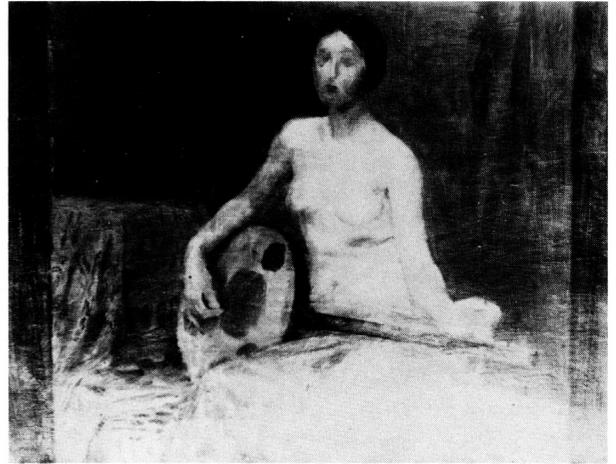


fig.25 《諧音》



fig.26 《画稿集》東京芸術大学本《絵因果経第八卷》の模写 旧益田家本《絵因果経第七卷》の模写 他

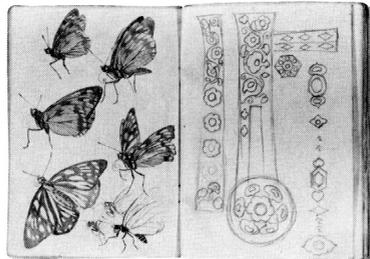


fig.27 《画稿集》



fig.28 《画稿集》

明治美術会に所属していた頃の藤島は歴史的風俗画や、歴史或いは説話を主題とする作品を発表しているが、白馬会においては、黒田清輝の影響を受け、「新聞の三面記事を描くように、日常囀目の出来事」<sup>24)</sup>、光景を描いた、写実的な、外光派的な風景画、風俗画を発表している。そして、《天平の面影》と《諧音》は、非現実的な抽象的な主題を持ち、単純で、平面的な画面構成ではあるが、あくまでも写実的な手法で描かれている。藤島の画業で、終始貫かれたもの、それは写実である。藤島は晩年病床で内田巖に「絵は写生が必要だがその写生を越えたものでなければならない。自分なぞも結局写生以上に出られなかったので写生で終わってしまった」<sup>25)</sup>と言ったそうである。

《天平の面影》は、白馬会に初めて出品された歴史的な構想画であったろう。《画稿集》の中の《天平の面影》に関連がある素描の中で、最初にあるのが、《東大寺戒壇院扉絵》の模写であるが、これは1900年以降のものと思われる。それというのも、1900年以降に藤島が知ったと思われる、ウージェーヌ＝サミュエル・グラッセの《「ベル・ジャルディニエール」のカレンダー》の模写がその前にあるからである。つまり、藤島がヨーロッパ世紀末美術の資料を見た後に、《東大寺戒壇院扉絵》等が描かれている。ヨーロッパ世紀末美術の影響を受け、それに、或いは西洋絵画に何が表現されているかを知悉していたと思われる藤島が、日本において、何を描けばよいかを暗中模索した軌跡が、《造花》《画稿集》《天平時代》《天平の面影》《諧音》そして《蝶》という作品ではないであろうか。

仏教説話、仏の一代記《絵因果経》から見れば、《天平の面影》には、仏の出家を妨げようと音楽で誘惑する伎女の、言わば「凡夫の音楽」を、一方《諧音》には、仏を讃え、花を散下し伎楽を奏する天人の、言わば「天界の楽」と言ったような、相対的な主題が隠されているようにも思える。

また、雅楽に対する藤島の関心、或いは興味はなみなみならぬものであったように思える。《天平の面影》《天平時代》そして《諧音》には、今は使われていない雅楽の楽器が描かれ、Ⅲ章で述べるつもりであるが、1904年(明治39年)白馬会第9回展に出品された《蝶》は舞楽の曲『胡蝶』より題材を得て描かれたものであろうと思われる。西洋絵画、とりわけ世紀末美術に描かれている《蝶》には象徴的な意味が込められている。一方この『胡蝶』にも、東洋的な呪性とといった象徴的な意味が込められていることは明らかである。

## II

Panneaux Décoratifs, すなわち、装飾パネルをアルフォンス・ミュシャは、1900年パリ万国博覧会に25点出品

している。同年の白馬会第5回展のポスター(fig. 29)は、前述したように、ミュシャの《『ジスモンダ』のポスター》(fig. 30)からヒントを得た藤島の手になるものであった。上田敏と与謝野鉄幹による、その「白馬会画評」<sup>26)</sup>で、フランスから来た広告画として「始めの〈シャンパン〉の広告画の如きは西洋に幾らもあって、普通であるが頗る上乘のものであろう、注意を惹く為には輪郭は大胆であるが彩色が柔かです、ソレから〈トラピストス〉派の坊さんの姿をしている女の画ですが、アレも面白い、又サラベルナルの芝居の広告があります、立って居るのですが、アレは似顔のように見えるが巧く画いてある」とある。ここで言われている「サラベルナルの芝居の広告」の中にミュシャの《『ジスモンダ』のポスター》があった可能性はある。fig. 31は白馬会の会場写真である。向って左に藤島武二、長原孝太郎がいる。右に展示されているのは、カルロス・シュヴァーベの《「第1回薔薇十字展」のポスター》と、ミュシャの《『トスカ』のポスター》である。この写真はもしかしたら、この第5回展の時のものかもしれない。

1902年の《天平の面影》が出品された白馬会<sup>26a)</sup>に、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの《「石版画100年展」のポスター》、ピエール・ボナールの《「サロン・デ・サン」のポスター》等7点のポスターが展示された。この1902年の白馬会に展示されたポスターも、1900年の白馬会に展示されたポスターも、誰によって将来されたか不明であるが、白馬会第5回展の前に藤島はそのポスターを見たと思われる。

当時、ミュシャと同じチェコスロヴァキアの出身で、ウィーン分離派に属していた版画家、エミール・オルリックが、1901年6月頃まで日本に滞在していた<sup>27)</sup>。1900年の白馬会に、オルリックが日本で制作したものを、「中央の一部分幾個の小品所狭きまでに懸けられ」<sup>27)</sup>とあるように展示された。とすると、オルリックは、1900年夏頃には、もう来日していたのではなかろうか。オルリックによってもたらされたか分っているのは、エクス・リブリス<sup>28)</sup>(蔵書票)である。その他にヨーロッパ世紀末美術の資料を、オルリックが日本に持って来たかどうか不明である。しかし、ヨーロッパ世紀末美術について語ることが出来た人物であったことは確かである。1900年に藤島はオルリックと会っている。(fig. 32)<sup>29)</sup>『美術新報』(1-16, 1902年11月15日)に下記のような記事がある。「先年我国に来遊して一部洋画家に清爽なる感化を与えた奥太利人は本年開かれたセッセシオニスト展覧会に出品して大いに好評を博したる由」と。その清爽なる感化がいったいどんなものであったか分らないが、しかし、何かはあったのであろう。

また、『太陽』(6-10, 1900年8月)に目下英国に発行する美術雑誌の内有名なるものとして、*Studio* の他3誌をあげ、「スチューデオは大に進歩主義にて多方面に意を用い、毎号各国美術界現今のすうせい云々」と紹介している。この頃 *Studio* がもう日本に入り始めたのではないかと思われる。

パリ万博に出張して、1900年10月に帰国した元東京美術学校図案科教授、福地復一は、グラッセの《「マルケ・イंक」のポスター》他18点のポスター<sup>30)</sup>を持帰り、現在、東京芸術大学に所蔵されている。黒田清輝<sup>31)</sup>もヨーロッパ世紀末美術の資料を数多く持帰ったという。1901年7月18日、黒田と久米桂一郎は二人で、洋画課助教授連他7名を招待、7月23日には藤島が黒田を招待<sup>32)</sup>している。この夜の話題の中心が、もちろんパリ万博やヨーロッパ世紀末芸術等であったことは想像に難くない。

このように、1900年前後より、ヨーロッパ世紀末美術が日本に将来され始め、その新しい芸術の渦は近代化の道を歩む極東日本に大きな波紋を巻き起したのであった。《画稿集》には、*L'Image* の表紙の模写があり、その右頁に、作者、題名は不明であるが *Panneaux Décoratifs* がある。(fig. 33) 《天平の面影》をそのような「パノオー・デコラチーフ」風の対幅の装飾画する構想が、当初藤島にあり、その構想が成就されることがなかったとしたら、その構想を人知れず棄て去ったとしたら、藤島にとって、《天平の面影》は失敗作であったのであろうか。《天平の面影》と《画稿集》の *Panneaux Décoratifs* を比較して見た場合、《天平の面影》は対幅に構成されているように思えない。

《諧音》は失敗作であった。「《天平の面影》とは又趣き異にした一層古典的の着きのあるものであり、当時文人評も一般的によかったと思うが」<sup>32)</sup>と、石井柏亭が述べている《諧音》は、作者の手により放棄された。それは上田敏が、只左手のフォアシオルトニング(短縮法)に、少し不十分な点があるとか、三宅克巳が、何んだか首が細いという非難の声もあるようだ<sup>33)</sup>とか述べているようなことではなくもしかしたら伎楽を奏する天人の、その理想なる音楽を描こうとして、聖なるものを宿すことが出来なかったためではないのであろうか。

しかし、《天平の面影》さらに《諧音》に、音楽というものが、すなわち聴覚というものが視覚的に表現されていることは確かなことであろう。

藤島は《天平の面影》のタイトルを、《天平時代の婦人像》(白馬会に出品された時のタイトル)、《天平時代の面影》(『美術新報』(1902年10月5日発行)に掲載された図版のタイトル)、《天平の面影》(『美術画報』(1902年11月20日発行)に掲載された図版のタイトル)と短期間のうちに



fig.30 アルフォンス・ミュシャ  
《『ジズモンダ』のポスター》

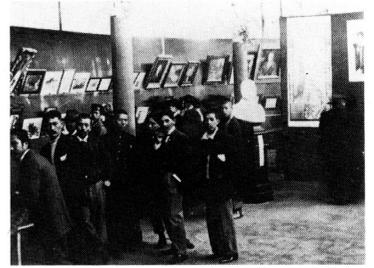


fig.31 「白馬会会場写真」の右隅 シュヴァーアーベ  
《『第1回薔薇十字展』のポスター》とミュシャ  
《『トスカ』のポスター》



fig.29 「白馬会第5回展」のポスター  
『明星』(1901年2月)に掲載



fig.32 エミール・オルリック《日本人》  
《縮図帳》



fig.33 《画稿集》

変えた。それは《天平の面影》が古代の衣裳を着け、古楽器を持った女人立像、すなわち歴史的な風俗画ではないことを示しているのではなからうか。つまり、感覚的なものを視覚化しようとする藤島の意図が、この《天平の面影》のタイトルに現れているように思える。その『美術画報』の英語のタイトルが Reminiscence of the Tempyo Era となっている。これは、箏篋の追憶ともとれる。すなわち持主であり、その胸に持たれた、光輝く畏き人の温もりなりを憶えているかと言ったような、つまり、聴覚とともに皮膚感覚をも表現されているように思える。藤島自身意識したのかどうか不明であるが、時間的なものが表現されているようにも思える。これは『明星』の持つロマンティズムに相通ずるところがある。そして《天平の面影》は詩人達の心の糸を震わさずはおこななかった。

蒲原有明は、有名な同題名のソネットを『明星』に発表している。1902年10月末、上京した石川啄木は、同年10月30日から12月19日にかけて、歌日記『秋舳笛語』に箏篋と思われる楽器を詠み込んだ歌を作っている。

相逢ふて霊の響の縦琴にさめてすがりし袖てふ恋か  
(11月15日)

また、『明星』(1902年12月)に

闇に馳せて素琴ひきゆく星人と調かなしかりがね渡る<sup>34)</sup>

「素琴」と出てくるが、これは箏篋のことを指している。啄木が上京した時は、白馬会は終了していたが、明星の例会に出席したり、与謝野家を訪問しているので、詩人達の間でこの《天平の面影》が大きな話題になっていたであろう。また、盛岡に居住していたが、《天平の面影》が再び白馬会に出品された1905年の「詩稿ノート『あこがれ』以後」に、啄木は下記のような詩を書いている。

わが立つ汀に  
落ち、また消えし影あり。  
月照る夜半の忍びに  
星人がしろがねの  
箏篋をし奏でて空をゆく  
影のみ見せしや、かりがね。(『かりがね』)

この詩と前の「かりがね渡る」と詠っている歌とは表裏一体をなし、素琴は箏篋のことであるという<sup>35)</sup>。また、同じく「詩稿ノート」に下記のような詩を書いている。

——夢白の裾長らかに  
枝づたひ幻にひく秋姫が  
わかれ心に朽箏篋の弛み緒ならず  
浮鳴りのそゝ音走る空名残  
それとし聞くは、金蝶の  
籠ばなれせし千万羽——(『みちのく神無月』)<sup>35)</sup>

啄木は箏篋が朽ちていることを知っている。この前年、1904年の白馬会に藤島が出品したのは《蝶》であった。さらに、啄木は柳暗花明の巷に出入し、「絃歌を天上の楽としたことがあった」という<sup>35)</sup>。これはまったく偶然なのであろうか。もっとも「絃歌」というのは三味線のことをいったのかもしれないが。藤島武二と石川啄木とは直接的な関係はまったくなかったと言っていると思う。しかし、同じ時間を共有し、しかも同じ空間を擦れ違ったかもしれない詩人と画家の呼応する鋭敏な感受性を感じざるを得ない。

しかし、藤島が描いた古楽器は音を出すことが出来ない。蒲原有明ではないが、「いざ君奏でよ、箏篋。」である。1911年(明治44年)に藤島は装飾画について、次のように語っている。「装飾画と云っても色や線だけではつまらぬ。それ以外に理想一意味を有たせたい、其題目の選み方は勿論取扱に於てもそうありたい」<sup>36)</sup>と。その理想、すなわち、藤島が音楽というものを描こうとして、「当代の面影を髣髴たらしめんとて」とした、古楽器をもつ女性の背後に楽の調べといったものがあるとすれば、それは何であったのであろうか。

過日、日生劇場で行われたワーグナー協会主催のシンポジウムで若杉弘氏は「現在、日本における洋楽文化が1900年前後のワグネルリズムに端を発している云々」と指摘されたらしい。藤島が音楽を愛好していたかどうか不明ではある。しかし、《天平の面影》も、そしてまた、《諧音》も、その当時の日本の音楽状況を色濃く反映しているように思える。(未完)

(ブリヂストン美術館学芸部)

- 1) 9月20日、藤島は、フランス・イタリアへの留学を命じられたが、それ以前に内示があったかもしれない。
- 2) 『美術新論』(3-4, 1928年4月)藤島武二『藝術のエスプリ』中央公論美術出版社、1981に再録
- 3) 『美術新論』(5-4, 5, 1930年4, 5月)同上
- 4) 『季刊美術』(4, 1942年12月)同上
- 5) 『明星』(11, 1901年2月)p. 21に、そのポスターの図版が載っている。それには「昨年の白馬会広告画」とあり、また、「卅三年九月二十日ヨリ 十月廿五日マデ」と版刻されている。つまり、これは白馬会第5回展のポスターである。
- 6) 『明星』(18, 1901年12月)p. 42とp. 43の間
- 7) 《画稿集》の中に《桜狩》に描かれている駕籠のためであろうと思われる、寸法が入っている駕籠の図面があり、また、1891年と1892年に黒川真頼は「古代のよそおい」という講演をしているが、その講演の全文を藤島は《画稿集》の中に書き移している。この「古代のよそおい」は『国華』に1896年11月より「本邦風俗説女子部」として連載している。
- 8) 児島喜久雄「藤島さん『美術』(14-1, 1939年1月, p. 20)
- 9) 藤島の挿絵が初めて掲載された『明星』(10, 1901年1月)に、ポール・ベルトンによる《草吹》が掲げている。《造花》に描かれた少女の横顔が、ベルトンの版画によく似ている。
- 10) 石井柏亭『日本絵画三代誌』創元社、1942年(ベリカン社、1983年, p. 130)
- 11) 内田巖『画家と作品』高桐書院、1948, p. 69
- 12) 《天平時代》は、1952年のブリヂストン美術館開館記念展の時に展示されていたが、以後行方不明である。
- 13) 『明星』(卯歳第1号, 1903年1月)に載った、蒲原有明『天平の面影』の一節
- 14) 隈元謙次郎「藤島武二」日本経済新聞社、1967, p. 13
- 15) 「白馬会展覧評」(『精華』2, 1903年10月)の転写、『明星』1903年10月
- 16) 明治期の正倉院、空篋、阮咸については下記の文献を参考として引用した。『名宝日本の美術』(4)正倉院』小学館、1982; 青山茂編『正倉院の匠たち』草思社、1983; 正倉院事務所編『正倉院の楽器』日本経済新聞社、1967; 林謙三『正倉院楽器の研究』風間書房、1964; 東洋音楽学会編『唐代の楽器』、1973
- 17) 石井柏亭『画壇是非』青山書院、1949, p. 12
- 18) 『正倉院展目録』奈良国立博物館、1983, p. 35
- 19) 『稿本日本帝国美術略史』(ここには吊された型の図版が掲載されている)
- 20) 『明星』卯歳第1号, 1903年1月, p. 17, 『明星』に掲載された図版は逆版である。
- 21) 久留米にある《天平の面影》の旧蔵者は赤星家である。坂井犀水「現今の大家(4)藤島武二氏」『美術新報』10-9, 1911年7月)に掲載された《蝶》(ルツェルン)の所蔵は赤星家になっている。とすると、久留米にある《天平の面影》も、この時点では赤星家の所蔵になっていたと思われる。しかし図版として掲載されている作品は、fig. 21と同じであり、所蔵者が記されていないので、この図版の作品はこの時まだ藤島の掌中にあっただけではなからうか。つまり《天平の面影》は二点あったということを示しているのではないか。
- 22) 1943年、藤島の遺作展、画集刊行のために岩佐新が集めた写真資料の中にある。
- 23) 久保田米隠「浦島の道具と服装」『歌舞伎』1903年3月 p. 13
- 24) 藤島武二「レアリズムを再び検討す」『美術新論』(8-1, 1933年1月)、『藝術のエスプリ』中央公論美術出版社、1982)
- 25) 内田巖『画家と作品』高桐書院、1948, p. 63
- 26) 『明星』(8, 1900年11月)p. 14
- 26 a) この白馬会に出品された石版画4点は、《花菖蒲》(ミューズ)《菊・萩・撫子花》《花下の少女》である。これらの作品は、勿論ヨーロッパ世紀末美術の影響を色濃く示している。とくに、「1902」と版刻されている《花下の少女》は、《画稿集》の中にその模写のある、グラスセの「ベル・ジャルディニエール」のカレンダー、4月)より着想を得たものであることは明らかである。桜の木の下に人形を抱えている少女の顔は、グラスセの、同じく桜の木の下に佇む美しい女庭師にそっくりである。また、グラスセの背景の花盛りの木々の下を左から右へ縫って流れる春の流れを、藤島は日本風の春の小川に換え、しかも右から左の流れにしている。
- 27) 吉岡芳陵「エミール・オーリック」『太陽』7-8, 1901年7月, p. 143.
- 28) 『明星』7, 1900年10月
- 29) 『明星』(辰歳一, 1904年1月)にエミール・オルリックの版画《日本人と印度人》が掲載されているが、この《日本人》の方が、ブリヂストン美術館所蔵の《縮図帳》に貼布してある。サイン:「M Fujishima Emile Orlik 1900」とあり、『明星』の図版のは「Orlik 1900」である。《縮図帳》に『明星』に掲載された挿絵の試刷りと思われるものと一緒に貼込まれている。そして、この版画は長原孝太郎も所蔵していたようである。(小野忠重「日本版画の影響を受けたエミール・オルリックの版画」『アトリエ』12-1, 1935年1月 p. 44)
- 30) 新関公子「アール・ヌーヴォーとポスター」(東京芸術大学蔵アール・ヌーヴォーのポスターのカタログ)『昭和43年度東京芸術大学附属芸術資料館年報』1969, pp. 38~40, 福地復一により『稿本日本帝国美術略史』はまとめられた。(日野永一「アール・ヌーヴォーと日本の図案界」『アール・ヌーヴォーと日本』1982)
- 31) 『黒田清輝日記第2巻』中央公論美術出版社、1967, p. 616
- 32) 石井柏亭『画壇是非』青山書院、1949, p. 13
- 33) 「白馬会展覧評」(『精華』2, 1903年10月の転写)『明星』1903年10月
- 34) 中村洪介「石川啄木と西洋音楽」中『季刊芸術』39, 1976秋, p. 103
- 35) 同上, p. 119
- 36) 坂井犀水「現今の大家(4)藤島武二氏」『美術新報』10-9, 1911年7月, p. 274

## 美術館案内

### ブリヂストン美術館

**場所** 東京都中央区京橋 1-10-1(〒104)  
TEL. 03(563)0241

**開館時間** 午前10時～午後5時30分

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月26日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥400 大・高生¥300 中・小生¥150  
団体(15名以上)：  
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥100  
なお、特別展の場合は変更することがある。

### 石橋美術館

**場所** 福岡県久留米市野中町1015  
石橋文化センター内(〒830)  
TEL. 0942(39)1131

**開館時間** 午前10時～午後5時

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月26日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥150  
団体(20名以上)：  
一般¥250 大・高生¥150 中・小生¥80  
なお、特別展の場合は変更することがある。

石橋財団  
ブリヂストン美術館  
久留米・石橋美術館  
1982年度館報/第31号

Ishibashi Foundation  
Bridgestone Museum of Art  
Ishibashi Museum of Art  
Annual Report No.31(1982)

## Guide to the Museums

### Bridgestone Museum of Art

**Address** 10-1, Kyobashi 1-chome, Chuo-ku, Tokyo, Japan  
Phone: 03(563)0241

**Museum Hours** Open daily from 10.00 A.M. to 5.30 P.M. except Monday  
Closed from December 26 to January 4

**Admission** Adults ¥400  
Students ¥300  
Children under 15 ¥150

### Ishibashi Museum of Art

**Address** 1015, Nonaka-cho, Kurume, Fukuoka-ken, Japan  
Phone: 0942(39)1131

**Museum Hours** Open daily from 10.00 A.M. to 5.00 P.M. except Monday  
Closed from December 26 to January 4

**Admission** Adults ¥300  
Students ¥200  
Children under 15 ¥150



